

41437

教科書文庫

4
810
41-1934
20000
50952

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

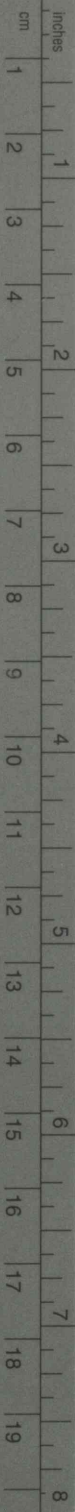


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Yo 19
資料室



訂五
新
日本
讀本
吉原義則編
五



資料室

375.9
4019

訂五

新

本

讀

本

昭和九年十一月二十六日
中學校國語漢文科・實業學校國語科用

文部省檢定濟

修文館發行



編纂趣意要項

國語教育の目的はまづ國語を正しく且つ完全に把握せしめ、次いで國語によつて表現された國民精神と國民文化とを徹底的に理解せしめるにあると信じます。

この目的を達成する爲に

- 一 現代の生命のさながらに動いてゐる現代文の精神を確實に味得せしめたい。
- 二 現代まで流れて來た源泉に棹さして前代文の精神を完全に理解せしめたい。
- 三 かくて國民精神を反射してゐる國語の運用に徹底せしめ、

世界の面前に於てそれを磨きあげる基礎を造りたい。
 以上三旗幟を目標となし、古今の代表作家の名篇について採訪
 厳選し、それを適宜に鹽梅排列しました。
 かくて國語愛から國家愛への道程を残す所なく榮しつゝ、中等
 學校に於ける國語教育の完成に貢獻したいと祈つて止まないの
 であります。

昭和九年七月

編者識

卷五 目次

一	我が國體	黑板勝美	一
二	吼えろ嵐	中川末吉	二
三	人臣の道	(神皇正統記)	四
四	花影の中に	田山花袋	六
五	春宵漫歩	夏目漱石	三
六	俳句に就いて	高濱虚子	七
七	春の潮	(諸家)	七
八	松江の曉	原文小泉八雲 譯文落合貞三郎	八

九	男 性 美	笹川臨風	翌
一〇	待賢門の戦	(平治物語)	五
一一	重盛諫言	(平家物語)	三
一二	鞭	吉田絃二郎	七
一三	耕 人	川路柳虹	七
一四	短夜の頃	島崎藤村	八
一五	登山の意義	田部重治	七
一六	上高地の神秘境	(日本アルプス と秩父巡禮)	三
一七	静 観	若山牧水	一〇三
一八	父 君 よ	(諸 家)	一三
一九	山 吹 の	(諸 家)	二七

乃木大将の殉死

二〇	忠 魂 義 魄	吉田松陰	一〇〇
二一	乃木大将の殉死	徳富蘇峰	一三三
二二	仁は心のいのち	(駿臺雑話)	一〇〇
二三	朝鮮の四季	遅塚麗水	一三五
二四	木犀の香	薄田泣菫	一四四
二五	心と言葉	和辻哲郎	一四九
二六	忘れ難き日	姉崎嘲風	一五五
二七	日蓮の温情	高山樗牛	一五九
二八	現代青年に望む	澁澤榮一	一六三

目次 — 終

訂五 新日本讀本 卷五

一 我が國體

黑板勝美

黑板勝美
長崎縣の人、明治七年生、文學博士、東京帝國大學教授。

准后

北畠親房
吉野朝の忠臣、正平九年(一二四)薨、年六十三。

神皇正統記

北畠親房の著、神武天皇より後村上天皇までの事蹟を記した書。

寶祚

准后北畠親房の書いた神皇正統記の開卷第一に、大日本は神國なり。天祖始めて、基を開き、日神永く統を傳へ給ふ。我が國のみこのことあり。異朝にはその類なし。この故に神國といふなり。」とある通り、天照大神以來萬世一系の天皇を上戴いてある我が大日本皇國が、寶祚と國運と天壤無窮であり、そこに國民の榮があることは、我が日本に生まれたものの誰しも心に思ひ、口にしてゐるところである。けれども、さてどうして我が日本が神國として今日まで數千年の間傳り、なほ將來もこの數

肇國

千年間傳つて來た言ふべからざる一つの力を、以て進んで行くかといふことは、肇國以來の歴史を、味はひ、さうしてこゝに皇室と國民との關係を知り、それに、依つて、我が國體が、いかに自然に、發達して來たかを知らなければ、了解することができないのである。

尤

尤も、從來傳つてゐる日本の太古から上代の歴史が、そのまますべて、正確であるとは、もとより考へることはできない。しかし、その中に、含まれてゐる神話或は傳説の起原、及びその發達して來た途をたどつて見て、その神話傳説が、萬世一系なる歴史的事實を、基礎として起つてゐるものと考へ得られぬであらうか。また、我が日本の上代の神話傳説の中に、この萬世一系といふ、信條が、生き／＼としてあるのは、何故であらうか。この意味において、我々は從來の傳説に、囚はれた行き方でなく、寧ろ今日の文

神話

信條

囚
文化史的研究

環境

化史的研究の上に、萬世一系の事實であるか否かを、研究して見なければならぬと思ふ。

これに就いての研究は、まづ人類社會の成立に對して、その環境並びに自然界がどういふ關係であつたかといふことを、地理的にも、生活状態の上からも、考へねばならぬ。その關係が我が日本にはいかに、現れてゐるか、いかに日本の國家が現れ、日本の社會が現れて來たかを、觀察して見ねばならぬ。まづ、我が日本の如き島國で、しかも平野の少い山國であるのと、支那或は印度の如き大平原國であるのとでは、その社會的集團の進みが、異なつてゐる。我が國の如き島國や山國では、まづ限られた地方で社會的集團が起るのであるから、他の民族との接觸がよほど遅れる。隨つて、その社會には、生存競争といふことよりも、寧ろ相互に、依存する平和な氣分が多く現れたであらうと思はれる。

相互依存

原始的

まだ原始的の社會であつて、たゞ自分等の目に觸れる範圍が、世界の全體であると考へて居つた時代に、於ては、もし我々の祖先の起つた所が四方山で、圍まれ、或は山もしくは海で圍まれた高天原、又は日高見國といふものであつたとすれば、その狭い小さな世界で、一つの社會的集團を作つて行くには、よほど平和的であつて、かの強者が弱者を、苦しめるやうなことはなかつたらうと思はれる。もし平和的に作り上げることに進んで行かなければ、その社會は、滅亡する外なかつたであらう。このことは、社會の細胞ともいふべき家庭の組織に就いてもまた考へ得られる。日本の上代の社會に於ては、家庭の組織せられる本となつてゐる夫婦の成婚に、近親結婚が行はれてゐたことは、神話傳説の中に多く現れてゐるのであり、この近親結婚によつて出來た家庭は、夫婦親子の關係が極めて親密である。随つて相互の愛

結婚

を以て結ばれた平和な社會が、こゝに成立つて來たことを信じ得るいろ／＼な條件が、日本の社會の發達の上に、備つてゐるのである。

さて、この平和な社會がだん／＼發達する、具合を見ると、一番初には、別に専門的の職業が各家々にあつたのではなかつたらしい。それがだん／＼進んで來た時において、その社會の成立、その國民生活に必要な精神的や物質的分業が、自然に行はれて來たものであらう。そこで此等の家々では、最初は職業の名稱を以て各、その家の名稱とすることに進んで行つたのである。中臣とか、齋部とか、或は物部とかいふ名稱はもと職業の名稱であつたのが、それ／＼家の名前となつてゐるのである。この場合、それがまた國家的組織と一致してゐるのが、即ち我が國上古の氏族制度であるといへる。さうして特殊な職業がなくて

中臣

天兒屋根命より出た氏族の名、世々祭祀を掌る。

齋部

天太玉命より出た氏族の名、代々祭器を作り、祭祀を掌る。

物部

可美眞手命より出た氏族の名、宿衛を掌る。

氏族制度

國家の最高地位を占められるのは、たゞ皇室のみであらせられるから、御家名を申上げる必要がなく、たゞ尊稱だけを申上ぐればよろしい。今も、お上とか、上様とか、陛下とか申上げれば、天皇陛下の御事である。大昔から我が皇室には御家名といふものがない。たゞ親王や皇族の御方が別家をなされば、何の宮様と申すのみである。天皇陛下には、すめらみこと、即ち我々を統べてゐられる御方といふやうな意味の尊稱はあるが、それ以上に、特別に皇室として御名前を附して、かういふ御家の誰様と申す必要はないのである。

主權者

主權者の家に名稱を持つてゐない國は、世界中今日に於てただ我が大日本皇國あるのみである。いかなる國でも、日本以外の國々の主權者は皆その家名を有してゐる。これは要するにもと國民の一部であつた者が、後に勢力を得て主權者となつた

革命

からである。日本の皇室は、この點に於て、社會發達の最初から主權者として今日まで繼續せられたことを、事實の上に於て示されてゐるのであつて、實に世界に類例のない皇室の萬世一系を、この事實の上に最もよく證明してゐるといはねばならぬ。革命が行はれた國の主權者には必ずその家名があるはずである。

遡

天照大神が皇室の天壤無窮なるべきことを宣りたまひし神勅は、實に皇室にも國民にも力強き感激を以て、永久に傳へられて行くのである。我々がこの肇國の昔に、遡つて、大神の偉徳を仰ぎ奉る時に、我々は國民としての信仰に生きる。我々はその信仰を益、養成して行かねばならぬ。歴代の天皇は、萬世一系を事實に於て天壤無窮に繼承したまふのであり、我々國民は、たゞ皇室の御爲に身命を捧げて努力するのみであり、こゝに始めて

信仰

武烈天皇
第二十五代。

日本書紀

三十卷、舍人親王・
大安磨等勅を奉じて
撰した、神代から持
統天皇までの歴史、
養老四年(元)成る。

末多王

百濟の暴君。

仁徳天皇

第十六代。

醍醐天皇

第六十代。

日本民族として進んで来た意義が現れる。さうして、前に述べたやうに、最初に出來た家庭の成立に於ける親子及び夫婦の關係を推し擴げたものが、實に皇室と國民との關係である。それは一に歴代の天皇が、義は君臣であるが親しみは父子のやうな大御心で國民に、君臨せられ、神武天皇から今日まで、連綿として皇統を傳へられ、御一人の天皇も國民を、虐げられた御方がおいでにならぬといふ美しい歴史を有する所以である。武烈天皇の御事蹟として日本書紀にある物語には、百濟末多王の事蹟が混入してゐることは、早く學者の、定説となつてゐる。仁徳天皇が民家の煙を、御覽になつての御仁政も、醍醐天皇が寒夜に、御衣を脱がせられた御事も、皆各時代の天皇の御仁慈の大御心が、仁徳天皇や醍醐天皇の聖徳の上に現れてゐるので、仁徳天皇醍醐天皇のみが、聖徳の天皇であらせられたといふのでない。また

後奈良天皇

第一百五代。

供御

宸筆

式微

後奈良天皇が、その日の供御にも御困りになつてゐるほど皇室の、衰微した時代に於てなほ宸筆を染めて般若心經を書寫し給ひ、國民の病苦を救はうとせられたことは、皇室の式微から二たび盛んな輝かしい皇運の光がさして來た所以である。かやうにありがたき皇室の下に我々國民は生きてゐる。皇室の御爲に、忠良なる臣民として御奉公申し上げ、初そ、始めて萬世一系の皇運を扶翼し奉ることが出来るのである。

神皇正統記にも、窮あるべからざるは我が國を傳ふる寶祚なり。仰ぎて尊み奉るべきは日嗣をうけたまふ皇すべしになんおはします。」といつてあり、また「凡そ王土に生まれて忠を致し身を捨つるは、人臣の道なり。かならずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されど、後の人を、勵まし、その跡を、憐びて賞せらるるは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。」

中核

と述べてあるのは、親房がいかによく日本精神の中核に觸れてゐたかを觀るに足るもので、我等國民が、服膺すべきモットーであらねばならぬ。

我々は、我が國の繁榮が同時に皇室の繁榮であり、また皇室の繁榮と一致する我が國の繁榮でなければ、肇國の大精神と矛盾するものと考へねばならぬ。そこに始めて天照大神の神勅の意味がよく了解せられて、日本の國運と民福は進んで行くのである。されば、我々は皇室及び國體を中心として、精神的にも物質的にも向上を圖るべきであり、皇室及び國體を忘れて、たゞ外來の文化に心酔し、國民的自覺を失ふことがあつたら、それと同時に日本民族の滅亡が到來する。我々國民は、永劫にこの大信條の下に進まねばならぬ。

永劫

二 吼える嵐

中川末吉

、
吼える、あらし、

、
恐れじ、われ等

、
見よ、天皇の

、
燦たる、御稜威、

、
遮る雲、

、
斷じて、徹る。

、
狂へ、怒濤、

ゆるがじ、われ等。

見よ、磐石の

嚴たる祖國、

太平洋

斷じて安し。

來れ、猜疑、

許さじ、われ等

見よ、極東の

確たる平和

亞細亞の土、

斷じて守れ。

舉れ、日本、

いざ、われ等

見よ、國民の

凜たる苦節、

正義に、今

斷じて立てり。

(東京日日新聞)

三人臣の道

凡そ王土に生まれて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されど、後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるるは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功もなくして、過分の望をいたすこと、自ら危うする端なれど、前車の轍を見ることが、まことに、有難き習なりけむかし。中古までは、人のさのみ、豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。はたして身を滅し家を失ふためしあれば、戒めらるるも理なり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬する事をとむべし。といふ制符度々ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は、宣旨を賜はりて、諸國のつはものを

前車の轍

習ひなりけむかし
なりぬれば

制符

語らはる

下されにき

いひがひなし

申すめる

言語は
易の繫辭傳の語

樞機

あからさまに

事にこそ

堅き氷

霜ヲ履ンデ堅氷至ル
(易經)

徴し具しけるに、近代となりて、やがて語らはるるやから多くなりしによりて、この制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなきことになりけり。この頃の諺には、一たび軍に駆合ひ、或は家子郎從節に死ぬる類もあれば、我が功におきては、日本國を賜へ。若しは、平國を賜はりても足るべからず。などと申すめる。まことに、さまで思ふ事はあらじなれど、やがてこれより亂るる端ともなり、又、朝威の輕々しさも推し量らるるものなり。言語は君子の樞機なり。といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕る事はあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣賊子といふものは、その初め、心言葉を慎まざるより出てくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の悪しくなりゆくを末世とはいへるにや。

(神皇正統記)

田山花袋

名は録彌、群馬縣の
人小説家、昭和五年
歿年六十。
六田の渡
奈良縣吉野川の渡。

四花影の中に

田山花袋

四處
閃々

金剛山を越えて、吉野の六田の渡しを渡つたのは、その日の午後四時少し過ぎた頃であつたが、途中花を挿して歸つて來る人に聞いて見ると、花は今眞盛りとの事で、今日一日早くても、遅くても、満開を見る事は出來ないとの話であつた。漸く六田の柳の渡しほほとりに來た頃は、夕日がもう彼方の山の凹處に沈まうとして、清い速い吉野川の流は、閃々と美しい、紋を川の面に描いて居た。自分は船が前岸に、著くと、そのまま、急いで飛び下りて、一直線にそのなつかしい吉野山へと志した。街のはづれに一つの黒い門があつて、此處から奥の院まで六十町餘と書いた札などが立つてゐるが、それを、潜ると、もう山で、櫻の花が、段々路の兩側に見え出して來る。入口は盛りが過ぎ

端坐

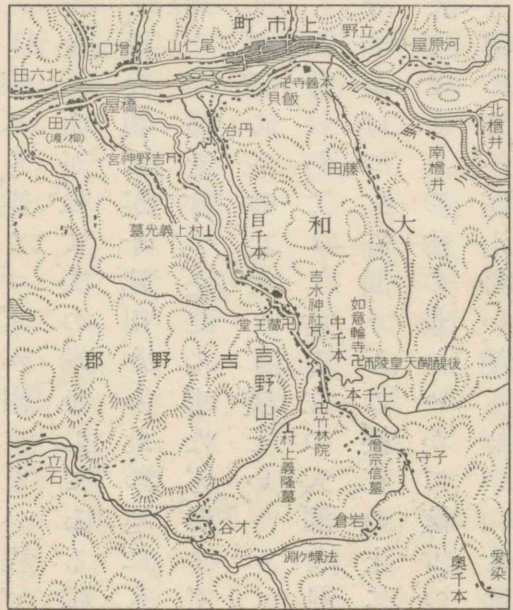
護良親王
後醍醐天皇の第三子
大塔宮。
十津川
奈良縣吉野郡、熊野
川の上流。

鼎立

て、花びらの枝に残つて居るのも極めて少いが、次第に登れば登るほど、花は多く盛んになつて、四邊の眺望の美しさは殆ど言葉にも筆にも、盡くす事が出來ない程である。右手には越えて來た金剛山が、偉丈夫の端坐してゐる様に、聳えてゐて、それを仰ぐと、護良親王が十津川から此の地に入つて、千早赤坂と共に三足鼎立の勢を作つた時の事などが、すぐ胸をついて浮かんて來る。兩道の花はいよゝゝ美しい。自分は今行く、右と左の大澤を見下しながら、夕日の花やかな光がぱつと谷間々々の櫻花の上に匂ひ渡るのを見て、獨りつくづく、とこの山の景のいかに、懐古の情を起すに、適して居るかを思つた。花も好い、境も好い、山も面白い、けれども吉野朝の遺跡が無かつたら、決してこれ程の感興を起す事はなかつたらうに……

悠久

玉置山
奈良縣吉野郡



村上彦四郎義光の墓の前にひざまづいた時は、自分は何とも
 知れぬ悠久な感にうたれて、しばしは其處を立去ることが出
 來なかつた。前には片
 岡八郎があつて親王の
 難を玉置山に救ひまゐ
 らせ、後には此の彦四郎
 義光があつて、身をもつ
 てこの吉野の退口を安
 全に守りまゐらせたの
 であるが、もし後年にい
 たるまで、この忠勇無二
 の義光が生きて居たならば親王は決してはかない、最期を遂げ
 させ給ふやうな事はなく、或は吉野朝の衰へたのを、恢復する事

踏々跟々

罵倒

が出来たかも知れない。つたないのは吉野朝の運命である。
 この時である、自分の立つて居る傍を、一群の、醉客が踏々跟々
 として歩いて來たが、
 卑しい歌を歌ひなが
 ら、遠慮もなしに、自分
 の肩をかすめるやう
 にして過ぎて行つた。
 自分はすでにこの山
 に登つた時から、心も
 ない花見客のわいわ
 いと酒に酔つて歩く
 さまを非常に心よからず思つてゐたが、今は丁度自分の心が無
 限の感慨にうたれてゐる事とて、一層深く憤慨して罵倒してや



(本千の中) 山野吉

草莽の孤臣

らうかと思ふ程癢に障つた。けれど花の穉やかに咲き匂つてゐる間を、一步二歩と辿つて行くと、その癢に障つた念は、一種深い、悲哀の情に變つて、どうにもかうにも堪らないやうな心地になつたと思ふと、涙がはらはらとやつれ果てた旅の衣の袖を傳つて落ちた。そして草莽の孤臣といふ感が胸も狭しと溢れて来て、自分も若し其の時代に生まれたならば、たとひ雑兵となつても、この勤王の志を致したてあらうにと思つた。

其處から吉野の山奥までは五十町、自分はこの間をどんな感慨と、どんな涙とを以て行き過ぎたであらうか。護良親王の奮戦した藏王権現堂の高く櫻花の上に聳えて居るのを仰いで、どんなに烈しい懐古の情にうたれたのであらうか。吉水院の行在所のあとを尋ねては、どんなに深い暗涙にむせんだであら

藏王権現堂
藏王権現堂とも言ふ、
金峯山寺の本堂、役
行者の開基、天正年
中秀吉が修造した。
吉水院
藏王堂の南約一一〇
米。

按

うか。

此處で、この花の中で、後醍醐天皇は劍を按じておかくれなされたのである。此處で楠正行は歌を扉の上に遣し、死を決して、敵軍に向つたのである。此處で吉野五十年の帝業は建てられて、正義といふ精神は、赫々として光を日月と争つたのである。そしてその六百年前の夢のあとは、今もなほ美しい満山の花影の中に、微に匂ふばかりに残つてゐるではないか。

これ程美しい詩があらうかと、自分は幾度も思つた。自分がかういふ風にこの吉野朝の遺跡を處々に見て、一層深くこれに對する同情の念を増したが、翌日吉野山を下る時には、幾度となく振返つて、殆ど別れ難い思ひがした。

(花袋紀行集)

文法
遅い
美しい
少い
生きる
憤慨する
生まれる

夏目漱石
名は金之助、東京市
の人、英文學者、小
説家、大正五年歿、
年五十。

五春宵漫歩

夏目漱石

葦酒

山里の朧月夜に乗じてそゞろ歩きす。觀海寺の石段を登りながら、仰數、春星一二三」といふ句を得た。余は別に和尚に逢ふ用事もない。逢うて雑話をする氣もない。偶然と宿を出て足の向くにまかせてぶら／＼するうち、ついこの石段の下に出た。しばらく「不許葦酒入山門」といふ石を撫でて立つてゐたが、急に嬉しくなつて登り出したのである。石段を登るにも骨を折つては登らない。一段登つて、佇む時、何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に、詩が作りたくなる。默然として我が影を見る。角石に、遮られて、三段に切れてゐるのは妙だ。妙だから又登る。仰いて天を望む。寝ぼけた空の奥から、小さい星がしきりに瞬きをする。句になると思つて又登る。かく

五山
建長寺・圓覺寺・淨智寺・淨明寺・壽福寺
塔頭

洒落



草枕繪卷・觀海寺（穴義平筆）

して余はたうとう上まで登り詰めた。石段の上で思ひ出す。昔鎌倉へ遊びに行つて、所謂五山なるものをぐる／＼尋ねて廻つた時、たしか圓覺寺の塔頭であつたらう、やはりこんな風に石段をのそり／＼と登つて行くと、門内から黄色な法衣を著た、頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る、坊主は下る。すれ違つた時、坊主が鋭い聲で、「何處へ御出でなさる。」と問うた。余は只、「境内を拜見に。」と答へて、同時に足をとゞめたら、坊主はすぐに、「何もありませんぞ。」と言ひすて、すた／＼下りて行つた。あまり洒落だから、余は少しく先を越

庫裡

された氣味で、段上に立つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭を振りたて、遂に姿を杉の木の中に隠した。その間かつて一度も振返りはしない。成程禪僧は面白い、きびくしであるとのつそり山門を這入つて見ると、廣い庫裡も本堂もがらんとして、人影はまるでない。余はその時に心から嬉しく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんなに洒落に人を取扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴々した。禪を心得てゐたからといふ譯ではない。禪の「ぜ」の字も未だに知らぬ。唯あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。からやつて、美しい春の夜に、何等の方針も立てずに歩いてゐるのは實際高尙だ。興來れば、興來るを以て方針とする。興去れば、興去るを以て方針とする。句を得れば、得た所に方針が立つ。得なければ、得ないところに方針が立つ。しかも誰の迷惑

禪

にもならない。

絶句

「仰、數、春星一二三。」の句を得て石段を登り盡くした時、朧に光る春の海が帯の如くに見えた。山門を這入る。絶句は纏める氣にならなくなつた。即座にやめにする。

墓

石を登つて庫裡に通ずる一筋道の右側は、岡躑躅の生垣で、垣のむかひは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い處で、幽に光る。數萬の墓に數萬の月が落ちたやうだと見上げる。何處やらでしきりに、鳩の聲がする。棟の下にでもゐるらしい。

又平

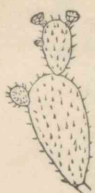
元祿三十四(一三六三)頃
の畫家、大津繪の祖。

では、無論ない。感じからいふと、又平のかいた鬼の念佛が、念佛をやめて踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで、一列に行儀よく、竝んで、踊つてゐる。その影が、又本堂の端から端まで一列に行儀よく、竝んで、踊つてゐる。朧夜にそゝのかされて、鉦も

鉦

奉加帳

霸王樹



杓廂子

撞木も奉加帳も打捨てて、誘ひ合はせるや否やこの山寺へ踊りに來たのだらう。

近寄つて見ると、大きな霸王樹である。高さは七八尺もあらう。絲瓜ほどな青い胡瓜を杓子のやうに壓しひしやげて、柄の方を下に、上へくと、繼ぎあはせたやうに見える。あの杓子がいくつ繋がつたらお仕舞になるのかわからない。今夜のうちにも、廂をつき破つて、屋根瓦の上まで出さうだ。あの杓子が出來るときには、何でも不意にどこからか出て來て、びしやりと飛びつくにちがひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちにだん／＼大きくなるやうには思はれない。杓子と杓子の連續が如何にも、突飛である。こんな滑稽な樹は、世の中にたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。

(漱石全集第二卷)

高濱虚子

名は清、松山市の人、明治七年生、小説家、俳人。

六 俳句に就いて

高濱 虚子

俳句は十七字の詩であるといふことは解りきつたことのもやうであるが、私はこゝに改めて、「俳句は十七字の詩である。」といふ事を、第一にはつきり言つて置く。

和歌は千數百年の歴史をもつ短い詩である。この和歌から連歌が起り、連歌から俳諧となり、俳諧から俳句が生まれて來た。この變遷は、少くとも百年、二百年の年月を経て成つたものであるが、畢竟、俳句は和歌の上の句が獨立して出來たものである。随つて、和歌では五七五七七の調であるが、俳句は五七五の調である。

この和歌の五七五七七といふ調子は、或感じを、縷々として述べるに適してゐる。たとへば、

縷々

畢竟

俳諧

六 俳句に就いて

あまの原
安倍仲麻呂の歌。(古今集)
安倍仲麻呂—中務大輔、船守の子、靈龜二年(755)遣唐留學生、在唐五十餘年、寶龜元年(810)歿、年七十。

高濱 虚子
手を取つて書かす
梶の廣葉哉 虚子

綿々

あまの原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも
といふ歌の如きは、たゞ月に對し、海原遠く離れた故山を、偲ぶものであるが、かく三十一字になつて見ると、如何にも遣るせない



高濱虚子筆

情緒が綿々として出てゐるやうな感じがする。これは五七五七七の調子が、自然に縷々としてその感じを述べるに適してゐるからである。ところが、俳句になると、

古池や蛙飛びこむ水の音

といふやうに、和歌では下の句として、缺くことの出来ない七七の文字が、省かれて、單に五七五といふ調子であるから、大に面目を改めて、ぼく／＼した調子になつて來る。上に述べたやうに、俳句も和歌の上の句だけを取つたものであるから、やはり和歌のやうな調子のものでありさうに思へるが、實際は大變違つて、全く別種のものとなつてゐる。この五七五といふ調子は、どんな調子のものであるかといふと、五七五の三つが一寸離れ／＼になつてゐるやうな感じがある。和歌の方は、七七といふ文字がその後にあるがために、全體の調子が、伸びやかになつて、渾然として一つに、溶け合つてゐるのであるが、その七七の文字が無くなつて、單に五七五だけになると、その五と七と五とが各、獨立して、別々のものとなつて行かうとする、傾向がある。これが和歌と俳句との大變な相違となるのである。

渾然

即ち、この古池の句にしても、先づ「古池や」といふ五字で、讀者に古池の景色を想像させ、次に「蛙飛びこむ水の音」といふ十二字で、蛙の飛び込む水音がするぞと、第二段の想像をさせるといふ、順序になつて来る。換言すれば、古池の句の場合は、初めの五字だけが獨立してゐて、あとの七と五とは連なつてゐるのである。

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふやうな句になると、五と七と五と皆離れゝゝになつてゐる。この句意は後に述べよう。

和歌は「テニヲハ」の文學といつてもよい程に、「テニヲハ」をやかましくいふが、これもやはり、綿々として盡きぬ情を歌ふに適した文學だからである。然るに、俳句では「テニヲハ」は勿論、説明的な言葉は出来るだけ省略し、「や」とか「かな」とかいふ特別の助辭を使用する。随つて「テニヲハ」には重きを置かない。この俳句の

奈良七重
芭蕉の句

調子から来る特色が、情を述べるのにはどうも不適當なのである。

この情を述べるに幾分でも不適當な文學である俳句の使命は、然らば何であるかと言へば、それは景色を描くといふ點にある。恰も繪畫のやうに、景色を言葉で、文字で、描くのである。

元來、文學は言葉で出来てゐるもので、言葉は時間的のものであるから、感じを順々に歌つて行くとか、又は事件を順々に述べて行くとかいふのには適してゐる。長い小説のやうなものでも、短い和歌のやうなものでも、或事件の推移を寫すとか、或感じを述べるとかいふ性質のものである。それが畫であるとき、目に見る或瞬間の景色を畫面に描き現すものであつて、時間的でなく、全く空間的のものである。然るに、俳句は意外にも、——私には「意外にも」といふ——繪畫に近いものとして存在してゐる。

空間的描寫

併しながら、景色を描くといつても、文學であるから繪畫とは全然同一にはならないが、大體に於て、文學本來の性質たる時間的變化を描くに適しないて、空間的描寫に適してゐると言へよと思ふ。これは五七五といふ調子と、切り詰めた短い詩形とから起つた、當然な結果で、これがやがて一方に大なる特色を形造つてゐるのである。尤も、かういへばとて、俳句も文學である以上、勿論、感じとか事件とかを述べてはならぬと言ふのではなく、又古來さうした俳句は全く無いなどといふのでもない。

又、俳句には「季題」といつて、春夏秋冬の季を述べなければならぬ事になつてゐるが、これは景色を描く上には當然の要求である。何故なれば、四季を超越した景色といふものは、全然この世界には存在しないからである。次に、實際の句に就いて説明を二三試みよう。これは極端な例であるが、

季題

女郎花腰黒茶碗髻奴

といふのがある。これはどんな意味かといふと、女郎花が咲いてゐる、その側で髻の生えた奴が腰黒茶碗で飯を食つてゐるといふのである。これは前にも述べたやうに、五七五の調子から自然に離れゝになつてゐるのである。即ち、女郎花腰黒茶碗・髻奴と、別々に離して述べてあるので、たゞ我々が心の中でその離れゝになつてゐる物に、連絡をつけて、女郎花が咲いてゐる側で、髻奴が腰黒茶碗で飯を食つてゐる様子を思ひ浮かべるのである。これは繪畫にすれば、女郎花と腰黒茶碗と髻奴との三つの別々な物が、一畫面に描き現されてゐる譯になる。同じやうな極端な例であるが、前に挙げた芭蕉の句、

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふのは、奈良は古の都であつて、奈良七重は、人家が澤山立並

んでにぎやかであつたといふことをいひ、七堂伽藍は立派なお寺の大きなのがあり、そして「八重櫻」は奈良は八重櫻の名所であるから、櫻の盛りの奈良といふ事を現した句である。この句はどうかといふと、一寸とりとめのつかないやうな句らしく考へられるが、我々は勝手に想像して、一幅の古の奈良の畫を描き出すのである。これらの句は共に極端な例であるが、次は、

名月や

磯の句

炭太祇

市の人

八年

十三

明和

年六

十

傳うて

名月や舟なき磯の岩づたひ

といふ句に就いて考へて見よう。こゝに「名月や」といふのは、空に名月がかゝりやき渡つてゐるといふので、「舟なき磯」は、舟が一、艘も見えない磯といふのであり、「岩づたひ」はその磯の岩の上を人が傳うて歩いて行くといふのである。これにも言葉が大變に省略されてゐる。私は前に和歌は「テニヲハ」の文學であると言つたが、俳句では「テニヲハ」のみならず、その他の色々な言葉も省

燕村

谷口寅

府の人

三年

十七

天明

年六

十

燕村の句に、

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり

といふのがある。これは、水鳥が浮いてゐると、舟の中で女が菜葉を洗つてゐる景である。京都の賀茂川などにはよく菜を洗

つてゐる女を見受けるが場所は何處と限らない。舟で女が菜を洗つてゐる。菜を洗つてゐる女に、特別に何の關係があるといふのでもなしに、水鳥が浮いてゐるといふ景色で、全く繪畫と同じであり、即ち、舟に菜を洗ふ女と水鳥とで、近景と遠景とを描いてゐるのである。

かういふ風に、俳句は和歌の上の句から獨立した十七字から成つたものであるが、それが十七字になつて今日に到るまでに、十七字の詩として獨立する必要上、和歌の範圍を脱して、別に景色を描くといふ一つの大きな特色を成したのである。しかもこれは偶然に成つたのではなく、五七五といふ調子から來た當然の結果である。

(講演筆記)

七 春の潮

音たてて春の潮の流れけり
桃咲くや湖水のへりの十箇村
大和路や、雲雀落ち込む塔の蔭
残りなく花散る罌粟の夕かな
睡足りて姑く蠅と相對す
西瓜太郎躍り出でよと、割りてけり
柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺
明月や橋高らかに、踏み鳴らし
筆とる我にひそと炭つぐ母哀し
初冬や竹切る山の銚の音

高濱 虚子
河東碧梧 桐
巖谷 小波
松瀬 青々
尾崎 紅葉
沼波 瓊音
正岡 子規
内藤 鳴雪
萩原井泉 水
夏目漱石

小泉八雲

我が國に歸化した英國人、本名はラフカヂオ・ハーソン、詩人、前東京帝國大學講師、明治三十七年歿、年五十五。

落合貞三郎

松江市の人、明治八年生、英文學者、學習院教授。

松江

島根縣松江市。

搏

拍子

禪刹

洞

勤行

八松江の曉

原文 小泉 八雲
譯文 落合貞三郎

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな大きな脈が搏つやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴ふあらゆる音響の中で、最もあはれに思はれる。米搗の音は、日本といふ國土の脈搏である。

それから、禪刹洞光寺の大きい鐘がごうんと響いて、市街の空を撼がせる。續いて、私の家に近い材木町の地藏堂から、太鼓の淋しげな音が、晨の勤行を告げる。最後に、行商人の物賣の聲、大根やい、蕪菁や蕪菁、「薪や薪」。

明け方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の底から伸びた春の若葉の軟らかな緑の雲越しに、朝景色を

大橋川

松江市を貫流する川。

萬象

宍道湖

島根縣八束郡の内海、東西十六軒餘、南北約六軒、周圍約五十三軒。

杳乎

閉ぢた

街

味爽

島嶼

ながめやつた。大橋川の幅廣い、鏡の様な河口が、遠くの方では、戦々く様に萬象を映寫して、微に光つてゐる。この川は宍道湖に向つて口を開け、湖を右手へ擴つて、杳乎たる連丘に包まれてゐる。對岸の日本の家屋は戸がみな閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日がまだ出ない。遙かに見渡すと、薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲状をなした長い帯は、日本の昔の繪で見る通りであるが、實際の現象を眺めることのない者には、畫工が奇を衒つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽ひて、峰から峰へ、果知らぬ長さの紗のやうに横に延びてゐる。だから湖水は實際より遙かに大きく、味爽の空の色と入り交じつた美しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮かぶ島嶼で、夢の様な一帯の丘陵は、はてしのない土手道かと怪しまれる。そして霧が

分光鏡

立つにつれて、その趣は、徐に變つて行く。朝日の黄色な縁が見えてくると、今までのよりは更に強い、細やかな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水の



小泉へび

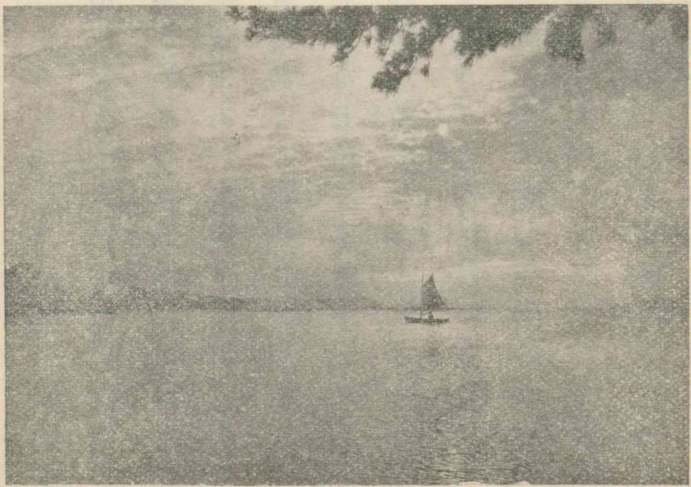
かなたにある高い建物の木地の色が、美しい靄の色で、蒸氣の立つ黄金色へとかはる。

朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が、今しも、帆を揚げんとしてゐる。こんな奇な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である。霞にぼやけた船の精靈である。併しこの精靈は、雲と同様、光線を受けて薄青

蓬萊

漱ぐ
潔齋

い光の中で金色に、震へてゐる。庭先の川端から手を拍つ音が起つてくる。一回、二回、三回、四回その手の持主は植込に遮られて見えないが、對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿は見える。めい／＼帯に小さい手拭を挿んでゐて、顔と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは、神道の祈りを捧げる前に必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日向け、四度手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の拍手の音



穴道湖

東雲

が反響の如くに出てくる。遠くにある、軽い、優美な、そして新月の様に彎曲した小舟からも出てくる。この、頗る異様な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が増して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは、人々が、今皆朝日——お日様——天照大神を拜んでゐるからである。「いとも貴き日の造り主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗はしくなし給ふ事を謝し奉る。」言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人々の衷心である。朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築の神社へ向つてもさうするのである。顔を東西南北へ向けて、群神の名を低聲で唱へる者さへ随分ある。天照大神を拜んだ後、一畑いちばた山やまの高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふ薬師如來の大伽藍のある處に向ひ、今度は佛教の諸式に随ひ、掌を合はせて軽く、擦る者

擦

杵築の神社
島根縣杵築町に在る
出雲神社。

一畑山
島根縣鏡川郡。

神道

もある。しかし、日本で最古のこの國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰もく古風な神道の祈の文句を唱へる。

「拂ひ給へ、淨め給へ、とほ神をみため。」

手を拍つ音がやんで、一日の仕事が始り出し、橋の上には、からころといふ下駄の音が、だんく高くひびいて来る。大橋の上で鳴る下駄の音は、忘れられない音である。速くて、陽氣で、音樂的で、盛んな舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る數へきれぬ人の足が、ちらくするのには驚くべき光景である。その足は皆細くて、恰好が均整を得てゐて、ギリシヤの古甕にゑがいた人物の足のやうに軽やかで、そして足を運ぶ時指を先に下す。實際下駄ではほかにしやうがない、それは、踵は下駄にも著かねば地にも著かないし、足は楔形くわがたの木の臺を前へ傾けては進むの

均整
ゑがく

楔形

躓く

闊歩
(淵)

であつた。足の下駄の上に立つだけでも、慣れぬ者には、困難であるのに、日本の子供は、三寸もある臺の下駄を、穿いて、親指と他の四本の指に挟んだ前緒だけで足を固定させて、全速力を出して駈けて行く。それでも躓きもせず、又下駄もぬげない。更に珍らしいのは、大人が木履で歩く光景である。これは木の臺に高さ五寸もある齒が附いて、全體の構造は、木製の長椅子の漆塗の標本かと思はれる。しかし、それを穿いた人は、まるで足に何もつけてゐないかのやうに、樂々と闊歩する。

やがて、學校へ急ぐ子供たちが出てくる。彼等の駈ける時に、綺麗な飛白の著物の闊い袖が波動すると、大きい蝶が、羽搏をするやうに見える。親船は、白色や黄色の大きい翼を擴げるし、埠頭の側で眠つてゐた小蒸氣船は、煙突から煙を吐きはじめた。

(まだ馴れぬ日本の瞥見)

笹川臨風

名は種郎、東京市の人、明治三年生、歴史家、文學博士。

謀叛

天空海闊

清濁併せ呑む

小牧山

愛知縣東春日井郡、天正十二年(三三四)こ

こで秀吉と家康とが戦つた。

千利休

名は宗易、千家流茶道の祖。

賤が岳

滋賀縣伊香郡、天正十一年(三三三)こ

こで秀吉と柴田勝家とが戦つた。

迅雷

佐久間玄蕃

名は盛政、柴田勝家の臣。

進退度を失ふ

義侠心

然諾を重んず

利害の打算

九男性美

笹川臨風

何をか男性美といふ。

氣象の天空海闊なるにあり、勇快果斷なるにあり。秀吉曰く、「我に謀叛するものはよもあるまじ。我ほどの主はあるまじきものを。」と。秀吉は男性美を發揮したる一人なり。彼の度量は大きく、胸は廣かりき。能く清濁併せ呑むの概ありき。小牧山の役、秀吉、千利久の茶會にあり。戦起ると聞くや、勇快果斷、そのまゝたちあがり、尻をまくりて、えいやとて出陣せり。賤が岳の戦には、疾風迅雷の如く進軍し、須臾にして、金瓢の馬表、岳麓に現れ、佐久間玄蕃をして進退度を失はしめたり。

男性は義侠心あるべきなり。然諾を重んじ、他人の急に走り、利害の打算以外に面白き氣象あらざるべからず。往時我が國

市井の徒

欽 犠 牲
氣 魄

旺 駿 漕
艇

に男伊達といふものありき。多くは市井の徒にして、中には無頼漢もなきにあらず。その道徳も偏頗にして、識見も高からざりしが、その勇氣ありて水火をも辭せざる底の、心意氣に至りては、誠に欽すべきものありき。威武に屈せず、權貴を恐れず、自家の利益を犠牲にして他を濟ふの氣魄に至つては、また江戸時代の名物たるに恥ぢずと謂ふべし。

男性は能く責任を知る。事を曖昧模糊に附するは男子の爲すべき所にあらず。人の臣としては、人の臣たる責任を知り、人の將たらば、人の將たるべき責任を知る。學生としては、學生の責任を知り、子としては子の責任を知る。すべての人が皆この責任を知らば、國運は隆々として、旺んなるべく、社會の文化は駿駿として進むべし。野球、庭球の如き、又漕艇の如き、各人その責任を知つてこれを盡くすを以て、その遊技に統一あり、興味あり。

左顧右眄

褐寬博

惴

悔ゆ。

古聖人

憚

孔子を指す。

蝕

若し個々勝手な事を爲して、その責任を蔑にせば、到底行はるべきものにあらず。遊技には獨り責任を知りて、その他には責任を忘れんとするが如きは、思はざるの甚しきものなり。

男性の美なるは常に後暗からざるにあり。後暗きものはとかくに隠れんとし、左顧右眄して、敢て進まざるなり。男子は公明正大、皎々として白日の如くなるべし。自ら潔きものは進むに勇あり、事を爲すに恐るる所なし。孟子曰く、「自反而不縮、雖褐寬博、吾不惴焉。自反而縮、雖千萬人、吾往矣。」と。人誰か過なからん。過を悔ゆるが男らしき所にして、男性美の存する所なり。古聖人はいへり、「過則勿憚改」と。また曰く、「君子過如日月食」と。非を遂げ過を隠しおぼせんとするは、畢竟自ら難地に踏み込んで常に後暗き思ひをなすものなり。過あらば直ちにこれを悔い、悔いてこれを改むるを勇ありとなす。過は日月の蝕す

翳す

渴仰

るが如く、浮雲の翳すが如し。これを改むれば、また赫々として光明あり。男性美はその男らしきによりて現る。英雄といひ、偉人といひ、君子といふ、皆男性美を發揮したるによりて、他の渴仰を受くるなり。

古の氣概あるもの、識見あるものは、自ら稱して大丈夫といへり。大丈夫とは、ますらをなり、男子なり、眞男子なり、最も能く男性美を發揮するものをいふ。自ら大丈夫と信ずれば、時に遇ふと遇はざると、運と不運と、皆問ふ所にあらず。自家が信ずる道に進み、その所信を貫徹するに於て、最も勇あり、斷あるなり。余は今の青年が常に自ら大丈夫を以て任じ、その男性美を發揮せんことを切望せずんばあらず。

彼の蒼たるものは天、我等が住める大地すら、既に滄海の一粟に過ぎず。況や我が生の須臾なるに於てをや。然れども、その

彼の蒼

彼ノ蒼タル者ハ天、
曷ゾ其レ極有ラン。
韓愈（祭十二郎文）
況や…於てをや

滄海の一粟

眇タル滄海ノ一粟ノ
ミ。蘇東坡（前赤壁
賦）

須臾なると、その滄海の一粟たるとは問ふを要せず。男性美は宇宙に於ける一奇觀なるべきなり。感化は永遠なり。男子の事業は悠久に互りて渝らざるなり。我等は男と生まれたるを誇りとす。男にして男らしからずんば、寧ろ男たらざるに若かず。すでに男として生まれたる以上は、男性美を發揮せずんば、男としての生まれがひなきなり。

男子としては眞男子たるべし、大丈夫たるべし、人の輝を以て相撲を取る勿れ。我が力を頼みとし、我が生の眞面目を發揮し、我が事業をして久遠の事業たらしめよ。一時は花の如し。永遠は果實なり、種子なり。

（男 性 美

文法

まじ
しむ
なり
如し
べし

卷末附圖参照

重盛 平清盛の長子。
 頼盛 平忠盛の第五子、清盛の弟。
 教盛 清盛の弟。
 尉 龍頭の兜。
 切斑 滋藤 花洛



一〇待賢門の戦

大内へ向ふ人々には、大將軍は左衛門佐重盛、三河守頼盛、淡路守教盛、侍には筑後守家貞、子息左衛門尉貞能、主馬判官盛國、子息右衛門尉盛俊、與三左衛門尉景安、新藤左衛門家泰、難波次郎經房、瀬尾太郎兼康、伊藤武者景綱、館太郎貞康、同じき十郎貞景を始として、都合その勢三千餘騎、六波羅をうち出でて、賀茂河を馳せ渡し、西の河原に控へたり。

左衛門佐重盛は生年二十三、けふの軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に櫛の匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締め、小鳥といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、滋藤の弓持ちて、黄桃花毛なる馬に、柳櫻摺つたる貝鞍置かせて、乗り給へり。重盛のたまひけるは、年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平氏な

樊噲

支那漢の高祖の功臣、勇士。

張良

支那漢の高祖の功臣。

関

見えられしつ
 引き寄せさせられたれども
 ふとりせむ

れば、三事相應せり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。誰かこゝに樊噲張良が勇をなさざらむ」とて、三千餘騎を三手に分けて、近衛中御門、大炊御門、大宮表へうち出でて、陽明待賢郁芳門へ押寄せたり。

大内には南西北の三方の門をさし固め、東表をば開かれたり。承明建禮の脇の小門をも共に開きて、大庭には馬ども多く引立てたり。梅壺桐壺紫宸殿の前後まで兵ひしとなみゐたり。これ皆源氏の勢なれば、白旗二十餘流うち立つたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘流さし揚げて、勇み進める三千餘騎、一度に関をどつと作りければ、大内も響き渡りて、夥し。

関の聲に驚きて、たゞ今までゆゝしく見えられつる信頼卿、顔色變りて草葉の如くにて南階を下られけるが、膝戦いて下りかねたり。人なみくく馬に乗らむと引寄せさせたれども、ふと

逸物

穆王

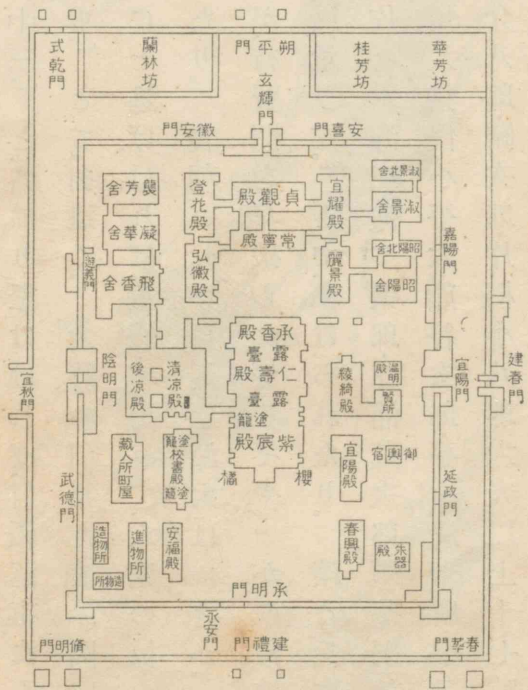
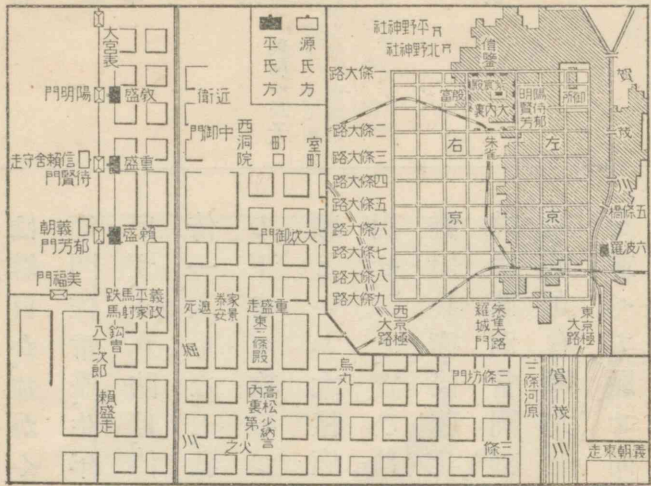
周の穆王が八匹の駿馬を驅つて天下を周遊した故事

駒 押したりけむ

不覺人

りせめたる大の男の、大鎧は著たり、馬は大きなり、乗り煩ふ上、主の心には似も似ず、逸りきつたる逸物なれば、つと出てむくとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺ゆるばかりにて、乗りにかね給ふところを、侍二人つと寄つて、疾く召し給へ。」とて押上げたり。餘りにや押したりけむ、弓手の方へ乗りこして伏しざまにどうと落つ。いそぎ引起して見れば、顔に砂ひしと付き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日頃は大将として恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信賴といふ不覺人は臆したりな。」とて、日華門をうち出でて、郁芳門へ向はれければ、信賴も鼻血押拭ひ、とかくして馬にかき乗せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用にあふべしとも見えざりけり。

左衛門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に残し置き、五百餘騎にて



僻目
 桓齋
 太宰
 嫡子
 椋子
 惡源太
 源義平、義朝の長子

猪俣

押寄せて呼ばはり給ひけるは、この門の大將軍は信賴卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔太宰大貳清盛が嫡子左衛門佐重盛、生年二十三」と名のり懸けければ、信賴返事にも及ばず、それ防げ侍ども」とて引退く。大將の引きたまふ間、防ぐ侍一人もなし、我先にと逃げければ、重盛愈勇みて、大庭の椋の木の下まで攻めつけたり。義朝これを見て、惡源太はなきか。信賴といふ大臆病人が待賢門を早破られつるぞや。かの敵追ひ出せ」と宣ひければ、承り候」とて、驅けられたり。續く兵には鎌田兵衛後藤兵衛佐々木源三波多次郎三浦荒次郎須藤刑部長井齋藤別當岡部六彌太猪俣小平六熊谷次郎平山武者所金子十郎足立右馬允上總介八郎關次郎片桐小八郎大夫以上十七騎轡を並べて馳せ向ふ。大音聲を揚げて、この手の大將は誰人ぞ。名のれ聞かむ。かく申すは、清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が

武藏の大藏
 武藏國(埼玉縣)比企郡菅谷村

谷口香崎
 通稱槌之助、京都市の人、畫家、大正四年歿、年五十二

嫡子、鎌倉惡源太義平と申すものなり。生年十五歳、武藏の大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしよりこの方、たび



(筆崎香口谷) 戦の門賢待

たびの合戦に一度も不覺の名をとらず。年積つて十九歳。見參せむ」とて、五百騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまく

豎
端武者
目な懸けそ
櫓

揉う。だりける

曩祖
平將軍
平貞盛
思はれけむ

り、北より南へ追ひ廻し、豎タテさま横ヨコさま十文字に敵をさつと蹴散キレらして、端武者どもには目な懸けそ。大將軍を組んで討て。櫓カの句の鎧に蝶の裾金物打つて、黄桃花毛オウダイカモの馬に乗つたるこそ重盛よ。押並べて組んで落ち、手捕にせよ。」と、下知すれば、大將軍を組ませじと防ぐ平家の侍ども、與三左衛門新藤左衛門をはじめとして、百騎ばかりが中にぞ隔たりける。悪源太を始として十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻右近の橋を七八度まで追ひ廻して、組まむとぞ揉ユうだりける。十七騎に驅けたてられて、五百餘騎かなはじとや思ひけん、大宮表へさつと引く。

大將左衛門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふところに、筑後守つと参りて、曩祖平將軍の二たび生まれ替り給へる君かな。」と、向うさまに譽め奉れば、今一度驅けて家貞に見せむとや思は

かいばさむ

組みぬべうもなし

れけむ、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、また大庭の椋の木まで攻め寄せたり。又悪源太驅け向ひ、見廻していひけるは、たゞ今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は、もとの大將重盛ぞ。以前こそ洩らすとも、今度に於ては餘すまじ。押並べて組んで捕れ、兵ども。」と、下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、我先にと進みければ、今度は難波次郎、同じき三郎瀬尾太郎、伊藤武者を始として、百餘騎が中にへだてたるに事ともせず、悪源太弓をば小脇にかいばさみ、鎧踏ん張り突つ立上り、左右の手を擧げ、幸に義平源氏の嫡々なり。御邊も平氏の嫡々なり。敵には誰か嫌はむ。寄れや、組まむ。」といふまゝに、先の如く大庭の椋の木の下に追ひ廻して、五六度までこそ揉ユうだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、また大宮表へ引いて出づ。悪源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけ

防げばこそ……ら
め

るに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が、不覺に防げばこそ敵
たび、驅け入るらめ。あれ速に追ひ出せ。」といひ遣されけ
れば、俊綱馳せてこのよしをいふに、承り候。進めや、ものども。」
とて、色もかはらぬ十七騎、大宮表に驅け出でて、敵五百餘騎が中
へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば、馬の足を立て
かねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ、我が子ながらも義
平はよく驅けたるかな。あ、驅けたり。」とぞ譽められける。

大將重盛、與三左衛門景安、新藤左衛門家泰、主従三騎かけ離れ、
二條を東へ引かれければ、惡源太鎌田にきつと目合はせて、こゝ
に落つるは大將とこそ見れ。返せや。」とて、追つかけたり。す
てに堀川にて追つつめけるが、弓手の方に材木多く充ち満ちた
るに、惡源太の乗り給へる馬かたなづけの駒にて、材木にや驚き
けん、馬手の方へけし飛んで、小膝を折つてどうと伏す。鎌田兵

かたなづけ
けし飛ぶ

匠
後

射向の袖

篋

鎧ごさんなれ

よつ引いて

大童

紀信

高祖の臣、項羽が滎
陽を圍んだ時、高祖
の車に乗り、楚をあ
ざむいて高祖を逃れ
しめた。

高祖

支那、漢の高祖、姓
は劉、名は邦、沛の
人、秦を滅ぼして漢
帝となつた。

滎陽
今、河南開封道。

衛延ばさじと、十三束取つて交ひ、よつ引いてひやうと射る。重
盛の射向の袖にはたと中りて飛び返る。やがて二の矢を射た
りければ、押附けにちやうと中りて、篋かつぎ碎けて跳り返れり。
惡源太、これは聞ゆる唐皮といふ鎧ごさんなれ。馬を射て落ち
むところを討て。」と、下知せられければ、またよつ引いて追ひざ
まに、箭の隠るるほど射こみたり。馬は屏風を返す如く、倒るれ
ば、材木の上に跳ね落され、兜も落ちて、大童になり給ふ。鎌田、堀
川を馳せ越えて重盛に組まむと落ち合ふ、重盛近づけてはかな
はじとや思はれけむ、弓の弭にて鎌田が兜の鉢をちやうと突く。
突かれてゆらゆる間に、兜を取つてうち著つ、緒を強くこそ締
められけれ。

與三左衛門馳せ寄つて中に隔たり、申しけるは、漢の紀信は高
祖の命に代りて滎陽の圍を出し、遂に天下を保たせき、「主辱しめ

…をや、助くる

所にてこそ、給ふべけれ

虎口を通る

らるる時は臣死す。」といふに非ずや。景安此に在り、寄れや、組まむ。」といふまゝに、鎌田兵衛と引組んで、取つて押へけるところに、悪源太馬を引起し、これも堀川を馳せ越えて、重盛に組まんと飛んで懸りけるが、鎌田をや助くる。大將をや討たん。」と思案しけれども、大將にはまたも寄せあふべし。政家を討たせては叶はじ。」と思ひ、與三左衛門に落ち合うて、三刀刺して首を取る。重盛は、頼みきつたる景安討たせて、命生きて何かせむ。」とて、すでに悪源太と組まむとせられけるを、新藤左衛門馳せ來り、「家泰が候はざらん所にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれ。」とて、我が馬を引向け、中に隔てて悪源太とむざと組む。政家は重盛に組まむとしけるが、主を討たせてはかなはじと思ひければ、新藤左衛門に落ち重なつて首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましか

巳の刻

手形

よりぞ、始まれる

ば、助り難き命なり。

十二月二十七日の巳の刻ばかりのことなるに、一むら雨さつとして、風は烈しく吹きたりけり。鎌田が鞍の前輪にも氷柱いたれば、乗りかねたり。悪源太これを見給ひて、手形をつけて乗れや。」と宣ひければ、打物抜いて、つぶくと手形を切つてぞ乗りたりける。鞍に手形をつくること、この時よりぞ始れる。

右兵衛佐頼朝は生年十三と名乗つて、敵二騎射おとし一騎に手負はせて、殊に進んで駈けられたり。左馬頭のたまひけるは「何といへども、若武者どもの軍するはまばらに見ゆるぞ、義朝駈けて見せむ。」とて、眞先に進まれければ、一騎當千のつはもの共、うちかこんでぞ戦ひける。頼盛しばらく支へられけるが、門より外へおひいださる。義朝つゝいて攻め戦へば、大宮表へ引きにけり。

平治物語
三卷、著者不明、平治の亂の顛末を記した軍記物語。

(平治物語卷二、待賢門の軍付信頼落つる事)

卷末附圖參照

大政入道
平清盛
黑絲緘
蛭卷
ゆゝしうぞ見えし
筑後守貞能
姓は平氏、家貞の子
緋緘
保元
保元元年(一一八二)
平右馬助
清盛の叔父忠正
新院
崇徳上皇
一の宮
崇徳上皇の長子、重
仁親王
刑部卿
清盛の父忠盛

二重盛諫言

太政入道は、かやうに人々數多いましめおいても、なほ心ゆかずや思はれけむ、既に赤地の錦の直垂に、黒絲緘の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜の序に靈夢を蒙つて、嚴島の大明神より現に賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。

「貞能」と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋緘の鎧著て、御前に畏つてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、このこといかおもふぞ。保元に平右馬助を始として、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一の宮の御事は、故刑部卿の殿の養君にてまし〜

旁院
鳥羽法皇
遺誠
平治元年
紀元一八一九年
院
後白河法皇
内
二條天皇
經宗
權大納言藤原經宗
維方
檢非違使別當藤原惟
成親
藤原氏
西光
俗名藤原師光
こそ然るべからね
法皇
後白河法皇
鳥羽の北殿
京都の南方にある

しかば、旁見放ち参らせがたかりしかども、故院の御遺誠に任せ、御方にて先を驅けたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信賴義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内にたてこもり、天下くらやみとなつたりしにも、入道隨分身を捨てて兇徒を追ひ落し、經宗維方を召しおこし、至るまで君の御爲に既に命を失はむとすること度々におよぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思召し捨てさせたまふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不当人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅ぼさるべきよしの御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めむほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らするか。然らずば、これへまれ御

儀
射むすらむ

きせなが

小松殿

重盛の邸、東山にあつた。

勿ねられたん

法住寺

京都市下京區、三十三間堂の東にあつた。

幸をなし参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面のものどもが中より矢をも一つ射むずらむ。その用意せよと、侍どもに觸るべし。大方は、入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。きせなが取出せ。」と、こそ宣ひけれ。
主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ参つて、「世ははやかう候。」と、申しければ、大臣聞きもあへ給はず、嗚呼、はや成親卿の頭の刎ねられたんな。」と、宣へば、その儀にては候はねど、入道殿のおんきせながを召され候上は、侍どもも皆打立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せむとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎮めむほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らするか、しからずば、これへまれ御幸をなし参らせむとは候へども、内々は鎮西の方へ流し参らせむとこそ議せられ候ひつれ。」と、申しければ、大臣、何によりて只今さることのおはすべき。とは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、

卿相雲客

へうする

諫

五戒

殺生戒・偷盜戒・邪淫戒・妄語戒・飲酒戒。

五常

仁・義・禮・智・信。

素

さる物狂はしきこともやおはすらむとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。

門前にて車より下り、門の内へさし入つて見給ふに、入道腹巻を著給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各色々の直垂に思ひくの鎧著て、中門の廊に二行に著座せられたり。その外、諸國の受領衛府諸司などは、縁にゐこぼれ、庭にもひしとなみたり。旗竿ども引きそばめく、馬の腹帯をかため、冑の緒をしめ、只今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿烏帽子直衣に大紋の指貫のそば取つてさやめき入り給へば、ことの外にぞ見えられける。入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうするやうに振舞ふものかな。大きに諫めばや。」とは思はれけれども、流石子ながら、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を紊らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を著て對はむこと、

面はゆし

流石面はゆう恥づかしうや思はれけむ障子を少し引立てて腹卷の上に素絹そねうの衣をあわてぎに著たまひたりけるが胸板の金物の少し外れて見えけるを隠さむとしきりに衣をひき違へひき違へぞし給ひける。

大臣は舍弟宗盛卿の座上に著き給ふ。入道宣ひ出さるることもなく大臣もまた申し上げらるる旨もなし。

やゝあつて入道宣ひけるは、あの成親卿が謀叛は事の數にも候はず。一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めむほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせむと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はらくとぞ泣かれける。

入道、さて、いかにや、いかに、と、あきれ給へば、稍あつて、大臣涙を押しへて、この仰せ承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人

邊地・粟散

天兒屋根命

神皇產靈原の子、藤原氏の祖、天照大神に臣事し、天孫降臨の時に隨從した。

幢相

弓箭

破戒・無慙

普天の下

普天ノ下王土ニ非ザルナク、率土ノ濱王臣ニ非ザルナシ。(詩經)

瀬川云々

許由を指す。

首陽山云々
伯夷・叔齊を指す。

の運命の傾かむとは、必ず悪事を思ひ立ち候なり。また御有様を見參らせ候に、更に現とも覺えず候。流石我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしより以來、太政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふこと、禮儀を背くにあらずや。就中御出家の御身なり、それ三世の諸佛解脱幢相の法衣を脱ぎ捨てて、忽ちに甲冑を鎧ひ弓箭を帶しまし、さん事内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんぞ。旁恐れある申し事にて候へども、心の底に旨趣を残すべきには候はず。まづ世に四恩の候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王土にあらずといふことなく、率土の濱王臣にあらずといふことなし。されば、かの瀬川の水に耳を洗ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅

蓮府・槐門（人）

聖德太子

用明天皇の長子、厩戸皇子、推古天皇二十九年（二六〇）薨、御年四十九。

人皆心あり云々

人皆心有り、心各執有り、彼是ナレバ則チ我非ニ、我必ズ聖ヲ非トセバ、彼必ズ愚ヲ非トス、共ニ是非凡夫ノミ、是非ノ理、誰カ是レ定ムベキ、共ニ賢愚、銀ノ端ナキガ如シ、是ヲ以テ彼ノ人願ルト雖モ還タ我ガ失ヲ恐ル（十七憲法第十）

命背きがたき禮儀をば存知すところ承れ。いかに況や、先祖にもいまだ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府・槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園盡く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらざや。今此等の莫大の御恩を思召し忘れさせたまひて、亂りがはしく法皇を傾け参らせさせ給はんこと、天照大神・正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんぞ。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。しかれば、君の思召し立たせ給ふところ、道理半ばなきにあらず。中にもこの一門は、代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮むる事は無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。聖德太子十七箇條御憲法に「人皆心あり。心各執あり。彼を是し、我を非し、我を是し、彼を非す。是非の理誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。銀

爰

あまの御魂を以て、たとひ人怒るといふとも、却つて我が咎を懼れよ。とこそ見えて候へ。然れども當家の運命未だ盡きざるによつて、御謀叛已に露れさせ給ひ候ひぬ。その上仰せ合はせらるる成親卿を召しおかれぬるうへは、たとひ君いかなる不思議を思召し立たせたまふとも、何の恐れか候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、

佛 陀
冥 慮
などか候はざるべき

敍 爵

君の御爲には、愈奉公の忠勤を盡くし、民のためには益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば、君も思召しなほすことなどか候はざるべき。君と臣とを比ぶるに、親疎分くかたなし。道理と僻事とを並べんに、いかでか道理に附かざるべき。これは尤も君の御理にて候へば、叶はざらん迄も院中を守護し参らせ候べし。併し、その故は、重盛はじめ敍爵より今大臣の大將に至る迄、併しなが

一入再入

御大事でこそ候は
んずらめ

迷廬八萬

須彌山のこと、高さ
八萬四千由旬あると
いふ。

忘れなんとす
忘れんとす

蕭何
漢の高祖の功臣。

ら君の御恩ならずといふ事なし。この恩の重きことを思へば、
千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずるに、一入再入の
紅にも過ぎたらむ。然らば院中へ参り籠り候べし。その儀に
て候はば、重盛が身に代り命に代らんと契りたる侍ども少々候
らん。これらを召し具して、院の御所法住寺殿を守護し参らせ
候はば、流石以ての外、御大事にてこそ候はんずらめ。悲しい
かな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の巔より
も尙高き父の恩忽ちに忘れなむとす。痛ましいかな、不孝の罪
を逃れんとすれば、君の御爲には已に不忠の逆臣ともなりぬべ
し。進退これ谷まれり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる
所詮は、ただ重盛が首を召され候へ。その故は、院参の御供をも
仕るべからず、また院中をも守護し参らすべからず。されば、か
の蕭何は大功かたへに越えたるによつて、官大相國に至り、劔を

重う。
深う。
先蹤

果報

平家物語
十二卷、著者不明、
別に灌頂巻と劔巻と
がある。平家物語の
後を承けて、二十餘
年間の治亂を録した
軍記物語。

帶し沓を履きながら殿上へ昇ることを許されしかども、叡慮に
背く事ありしかば、高祖重う戒めて深う罪せられにき。かやう
の先蹤を思へば、富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し重職といひ、
旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きむこと難かるべきにあらず。
富貴の家には祿位重疊せり、再び實なる木はその根必ず傷むと
見えて候。心細うこそ候へ。いつまでか命生きて亂れむ世を
も見候べき。ただ末代に生を受けて、かゝる憂き目に遭ひ候重
盛が果報のほどこそ拙う候へ。只今も侍一人に仰せつけられ、
御壺の内へ引出されて、重盛が頭を刎ねられむずることはいと
易きほどの御事にこそ候はむずらめ。これを各聞き給へ。」と
て、直衣の袖も絞るばかりに搔口説き、さめんと泣き給へば、そ
の座に並みゐたまへる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。

(平家物語卷二、教訓)

吉田絃二郎
名は源次郎、佐賀縣
の人、明治十九年生、
小説家、早稻田大學
講師。

二三 鞭

吉田 絃 二郎

鞭打たるる苦痛は、それが私達の生活をより善く、より強いものとさせる時、限りもなく貴い価値を持つてゐる。愛によりて與へらるる鞭の苦痛に、限りない価値が潜んでゐるといふことは、言ふまでもないことであるが、たとへ憎みによりて與へられた鞭の苦痛にしても、自分をより尊く、より善く、より強きものとなさしめるに、價值ある場合が少くはない……憎みが眞劍である限りは。

鞭打つといふことは、鞭打つ人の生活にとりてよりは、鞭打たるる人の生活にとりて多くの意義を持つてゐる。私たちが最初から完全な人間でないかぎり、鞭打たれるといふことは、呪ふべきことではない……それは悲しい苦しい事實には違ひな

呪

いが。

鞭打たれる苦痛に誰か泣かないで居られよう。鞭の痛さを知ればこそ、鞭打たれることが意義あるものとなつて来る。鞭の痛さを何かにまぎらして忘れようとするのは臆病である。どこまでも鞭の痛さを、痛さとして味ははなければならぬ。強い人間となることは、鞭の痛さを避けようとする者には不可能である。どこまでも強くなれ。そして、どのやうな残忍な鞭にも、まともに向つて鞭の苦痛を味ははなければならぬ。鞭は私達をより善き人間とする。けれども、善き強き人間でなければ、鞭に耐へることは出来ない。

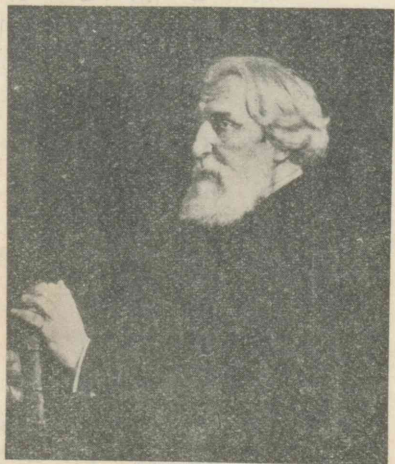
私達は與へられる鞭の苦痛を知ると同時に、尊いものであることを知つてゐる。けれども最後まで耐へ忍ぶには、往々にして餘りに弱い。弱きものはより悪しきものとなり、強きものは

手あき
手あき
手あき

より善きものとなる。善悪には二元はない。鞭を忍ぶと忍ばないとの差のみである。

鞭打たれるものに取つては、一つの軽い打撃も、より重き打撃と思はれる。鞭打つものに取つては、重き打撃も、あまりに軽きものと思はれるであらう。

鞭打つ打撃の餘りに重きを憂へる者は、愛の人であり、鞭打たれる打撃の餘りに軽きを感じざる者は、本當に自分を観ることの出来る敬虔な生活者である。「俺は今日は何も與へる物を持たない。」と言つて、乞食の手を強く握つたツルゲーネフの心は美しい。併し鞭打たれる者よりも、より以上に深い悲しみと



フネーゲルツ

俺

ツルゲーネフ
ロシアの小説家。(西
曆一八六一—一八八三)

輓轉
悶える
(悶ゆ)

愛とを以て、その友を鞭打つ者も尊い人格ではないか。鞭打たれた痛さを忘れるものは愚人である。鞭打つことの辛さを忘れるものは冷酷な人間である。



吉田絃二郎

鞭打たれるものは、終夜寝ることは出来ない。彼は輓轉として床上に悶える。鞭打つたものも亦終夜寝てはならぬ。自分の與へた鞭が友の心を傷つたとするならば、鞭打つた彼は、自分の心を傷んでなければ、友の心を築きなほしてやらなければならぬ。鞭打つ者には當然それだけの義務がある。鞭を持つてゐる多くの人々は言ふ、自分は正しいことのため

に鞭打つた。」と。彼は、弱き不幸な悪人を鞭打つてすやくと眠る。彼は繰返して言ふ、「正しきことのために鞭打つた。」として彼は眠る。

彼等は誤つてゐる。鞭打たれるものの傷れた肉と傷れた心とは、「正しきこと」のために慰められはしない。癒やされはしない。弱い人々にとり、「正しきこと」は何の力も慰めも持つてゐない。彼等は愛に飢ゑてゐる。彼等は涙に渴してゐる。

鞭打たれたものの悲しみ以上に悲しみつゝ、夜もすがら悶ゆるものでなければ、眞實に人を鞭打つ権利はない。

罪あるものを憎むものは、眞實の説教者となることは出来ぬ。罪あるものを愛し、罪を悲しむもののみが、鞭を使ふ権利を持つてゐる。

(生命の微光)

飢ゑる
(飢う)
悶

一三 耕

人

川路 柳 虹

土は固い、土は冷たい、まめやかなの耕人よ、
きみの腕かひなのくだくるまで鋤をば揮ふ耕人よ。

空は銀色の黄昏たそがれ、鈍い柘榴ざくろを滲ました日のひかり。
影かとはばかり枯れた梢も交じる遠い森

あゝ無窮の果までも肩かたをのばし、

その伸びやかな體軀を横たへた土よ、地平よ、
遮るものもない空に浮く鋤もつ人の姿。

「永遠」をこぼちゆく「時」のごとく、
下

しづかにおごそかに黙つた足どり。
 土は固い、土は冷たい、まめやかなの耕人よ、
 君の瞳はいつもたゞ地を映す、
 また日光と雨と霧とを、雲と虹と星とを窺ひ見る。
 けれども君の腕はいつも地に下りる、
 黒いふかい土の上、また揺れる麥の上、
 黄金の穂の上、碧玉の野菜の上に、
 さながら珠玉を^{もと}覓めて海に下る人の如く。

土は固い、土は冷たい、まめやかなの耕人よ、
 君はよ^{つと}しないこの世の「理」を知る。



(筆一レミ)

男られたもに鋏

苦しみを噛み、苦しみに耐へ、さては鋤振る腕の瘤をば愛する。

君の手は暗い畝のふちに泥を黄金にかへすまで、

青い葡萄を紫の酒に醸すまで、土を踏む耕人よ、

土は聖い、土は楽しい。

あゝ、その土壤の下に絶えず流れる温い血の音——君の踏む

足の下に、

君の瞳に、君の腕に、あゝ君の鋤持つ故に、

苦患は愛となる、土は緑となる。

(川路柳虹詩集)

島崎藤村

名は春樹、長野縣の
人、明治五年生、詩
人、小説家

ふさはしい

住めば都

一四 短夜の頃

17-15
島崎藤村

毎日よく降つた。もはや梅雨明けの季節が來てゐる。町を
呼んで通る竿竹賣の聲がするの、この季節にふさはしい。蠶
豆賣のくる頃はすでに過ぎ去り、青梅を賣りにくるにもやや遅
く、涼しい朝顔の呼びごゑを聞きつけるにはまだすこし早くて、
今は青い唐辛なつかしの荷を擔いだ男が來初める頃だ。住めば都とや
ら、山家生まれの私などにはさうでもない。寧ろ住めば田舎と
いふ氣がしてくる。實際この界限に見つけるものは都會の中
の田舎であるが、でもさすがに町の中らしく朝晩に呼んでくる
物賣の聲は絶えない。

どれ、そろ／＼蚊帳でも取出さうか。これはまだ梅雨の明け
ない時分のこと、五月時分からもう蚊帳を釣つてゐるといつて

よこした人への返事に、わざと書いて送らうと思つた私の戯れ
だ。この手紙をくれた人のやうに、五月時分からもう蚊帳なし
に暮されなくてはうるさく思ふのも無理はないが、併し、せいぜ
い一月か一月半ぐらゐしかその必要もないこの町中では、蚊帳
を釣るのは寧ろ楽しみなくらゐである。蚊帳の中に螢を放し
て遊ぶことを知つてゐた昔の俳人などは、確に蚊帳黨の一人で
あつたらう。それほどの物好きな心はもたないまでも、寝冷す
る心配も割合に少いところに足を延して、思ふさま長くつた
心持はなんともいはれない。枕に近く、髪に届く蚊帳の感觸も
身にしみる心地がする。蚊帳は内から見たばかりでなく、外か
ら見た感じも好い。内に紛れ込んだ蚊を焼くといつてあちこ
ちと持ち廻る蠟燭の火を、青い蚊帳越に外から眺めるなども、夏
の夜でなければ見られない趣だ。

古くてもよいものは簾だ。よく保存された古い簾には新しいものにない味はひがある。簾は二重にかけて見てもおもしろい。一つの簾を通して他の簾に映る物の象を透かして見る時など殊に深い感じがする。

團扇ばかりは新しいものに限る。この節の東京の團扇は粗製に流れて来たかして、一夏の間の使用にすたへないのがある。圓い竹の柄で、全部の骨が一つの竹から分かれていつてあるやうな丈夫なものは、餘り見當らなくなつた。扇子にもましてもつと一時的で、移りゆく人の嗜好や世相の奥までも語つて見せてゐるものは團扇だらうか。形も好ましく、見た眼も涼しく好い風のくるのを選び當てた時は嬉しい。それを中元のしるしといつて、訪ねてくる客などから貰ひ受けた時も嬉しい。この節の素足の心地よさ。もつとも裕から單衣になり、シャ

たへ。
(たぶ)

世相

中元

ツから晒木綿の襦袢になり、だんくゝいろくゝなものを脱いだ後で、私たちはこの節の素足にまで辿りつく。私は人間の身體の中で、一番足が眼につくといつた足袋屋のあることを知つてゐる。それほど職業的な意味からでなく見ても、足のもつ性格の多種多様なのに驚かされる。素足の表情ほど、また夏の夜の生氣をよく發揮するものはあるまい。

蚊帳・簾・團扇それから素足などと順序もなくこゝに書いて来た。自分の好きな飲料や食物のことなども少しこゝに書き添へよう。

茶にも季節はある。一番よくそれを感じるのは新茶の頃である。ところが新茶ぐらゐる香氣がよくて、又その早く失はれ易いものも少くないかと思ふ。三度ばかりも湯をつぐ中に、急須の中の嫩葉がすつかりその持味を失つてゐる事は、茶好きな

者のよく経験するところである。新茶の頃がくると、私はそれに古茶をまぜて飲むのを楽しみにしてゐる。六月を迎へ七月を迎へする中に、新茶と古茶の區別がなくなつてくるのも面白い。

新茶で思ひ出す。静岡の方に住む人で、毎年きまりて新茶を贈つてくれる未知の友がある。一年たゞ一回の消息があつて、それが新茶と一緒に届く。あんなに昔を忘れない人も珍らしい。私の方でも新茶の季節になると、もうそろ／＼静岡から便りのある頃かなどと思ひ出して、それを心待ちにするやうになつた。

簡単な食事でも満足してゐる私たちの家では、たまに手造りの柳川などが食卓に上るのを馳走の時とする。泥鰌どじょうは夏のものだが私はあれを好む。年をとるにつれて殊にさうなつた。

蓴菜



漬粕 到來物

篠

蓴菜ももんざい青陰元瓜茄子すべて野菜の類に嫌ひなものはないが、この節さかりに出るものはその姿まで涼しくて好ましい。冬の頃から私の家では到來物の酒の粕を壺に入れ、堅く目張をして貯へてゐるが、あれで新しい茄子を漬けることも今年の夏の樂しみの一つだ。

この短夜の頃が私の心をひくのは、一つは黄昏時の長いにもよる。あの一年の中の半分が晝で、半分はまた夜であるやうな北の國のはてを想像しないまでも、黄昏と夜明のかなり接近して、午後の七時半過にならなければ暗くならない夜が、朝の三時半過か四時近くには明け放れてゆくと考へることは楽しい。まだ私たちが眠から醒めないで半分夢を見てゐる間に、そこいらはもう明るくなつてゐると考へることも楽しい。

夏の夜は篠の小竹のふししげみ

芭蕉



そよや程なく明くるなりけり
 短夜の頃の深さ、樂しき空しさはこゝに盡くすべくもない。
 そこには又私の好きな淡い夏の月も待つてゐる。
 夏の月のよい事はそれが餘りに輝き過ぎない事だ。露に濡
 れた芭蕉の葉から涼しい朝の雫の滴り落ちる様な時もやつて
 來た。あの雫もこの頃の季節の感じを特別なものにする。あ
 れを見ると、まことに眼の覺める様な心持がする。長い梅雨の
 續いた時分には、私はよく庭の芭蕉の見えるところへ行つてあ
 の嫩い夢でも湛へた様な灰色がかつた青い卷葉が開いてゆく
 さまなどを、ぢつと眺めながら多くの時を送つた事もあつた。

(市井にありて)

田部重治

富山縣の人、法政大
 學教授・東洋大學教
 授、日本山岳會員。

あざやかな雪を戴き、朝日を浴びつつ、地平線上に雄偉なる姿

一五 登山の意義

田部重治

あざやかな雪を戴き、朝日を浴びつつ、地平線上に雄偉なる姿
 を浮かべてゐる山相は、自然が作れる最も偉大なる藝術である。
 幾度眺めても仰いても、それは見る人に雄々しき心と、氣高き理
 想と、漲る血潮とを與へずば止まない。山の姿ほど無私な心を
 以て、清淨なる魂を以て、憧憬し得られるものはない。
 山を憧憬し、その姿に自らを虚しうすることの出来る心に、眞
 純ならざるものはない。山を求むる心は、この偉大なる自然の
 藝術を通じて、自然の魂と融け合ひ、それが最も活ける力である
 ことを感ずる。山の姿に憧憬する心の淨化は、かくの如くして
 絶えず行はれてゆく。

かのアルプスの姿を見て、それを見るに堪へぬほどに醜いと

醜

憧憬

思惟

思惟する文學者を多くもつてゐた歐洲の十八世紀は、社會のどの方面に於ても、偽善と常識とに目立ち、創造と感激とに乏しい時代であつた。また、歐洲歴史上、自然に對して深い憧憬をもつた時代は、最も意義ある時代であつた。

渴望

日本の歴史に於て、自然を最もありのままの姿に於て讚美し、氣高い山の姿に限りない渴望の目を投じたものは、日本民族の最もあからさまな、最も清純なる情緒の源泉ともいふべきかの萬葉の詩人であつた。その後、大自然を崇拜し、それに傾倒する心持は、餘り著しく表現されてはゐないけれども、それは一つの傳統となつて、民族の一部には登山の風習は絶えることなく行はれてゐた。しかし、明治の時代になつてからは、この傾向は急激な歩みを取るやうになつた。即ち、大自然崇拜の精神は、登山の一般的風習となり、その文學となり、凄じい勢を以て社會の各

傾倒

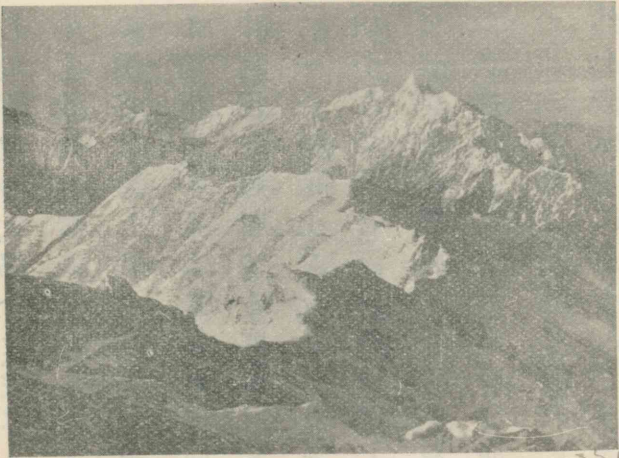
傳統

攀ぢ。

(攀じ)

文獻

方面に動いてゐる。



槍ヶ岳の遠望

かくして、あそこの山こゝの溪谷は、攀ぢられ探求された。のみならず、今まで顧みられなかつた文獻が引き出され、山岳溪谷に関する傳説が求められるに至つた。昔から登ることが不可能とされた山、足を踏み入れることの出来ないと思はれてゐた溪谷も、追々知られるやうになつて、今では溪谷の或物を除いては、究められなところ殆どなくなつた。

溪谷を探り終へる

しかし、山を眞に愛する人には、山を究め溪谷を探り終へると

主観的情緒

いふことは、彼の山に對するよろこびの一小部分に過ぎない。彼の喜悅の大部分は、彼がこれらの自然に對して懷き得る無限の主観的な情緒に存してゐる。いつまでも同一の山、同一の溪谷に對してすら湧出する無限の感情に存する。山に對する憧憬は、かくして絶えず向上し進展する。それはいつも無限に自己を超越する感情である。

一たび頂上を究めると、その山に對する興味を失ふ人、一つの山がもつ溪谷・深林、その美しい色調、その朝夕の光線によつて全容に與ふる變化、一步々々を運ぶ間にも起る刻々の響と靜寂との多様、そしてこれらの官能的に映ずる現象の下を流るる自然の生命の動きを認め、それに耳を立てることをしないものは、自然を機械的に見る人でなければならぬ。

自然の征服といふ言葉は、近代人の作つた最もあさましい言

官能的

跋 涉

葉の一つである。山に憧憬する人の懷く心は、いつも自然との一致融合でなければならぬ。最もよい意味に於て、自然を征服することは、自然を最もよく理解し、自然と融合することである。なければならぬ。

私は山を愛するといふことは、量的に見た山岳の跋涉に存するのではなくして、飽くまで主観的に、質的に、山岳に對して深まり行く情緒に存することを深く信ずるものである。そしてその意味に於て、山を愛するものにとつては、登山は山を登り盡くすといふことで、決して行き詰るものではないことを、私は茲に斷言したい。

(山と溪谷)

一六 上高地の神祕境

上高地
日本アルプスの南部
梓川の上流の高原、
海拔一八一八米。

島々
長野縣松本市の西約
十六軒。

徳本峠
島々から上高地に至
る途中の峠。

常念山脈
日本アルプスの一支
脈で、上高地の東北
に連なる。

豪宕

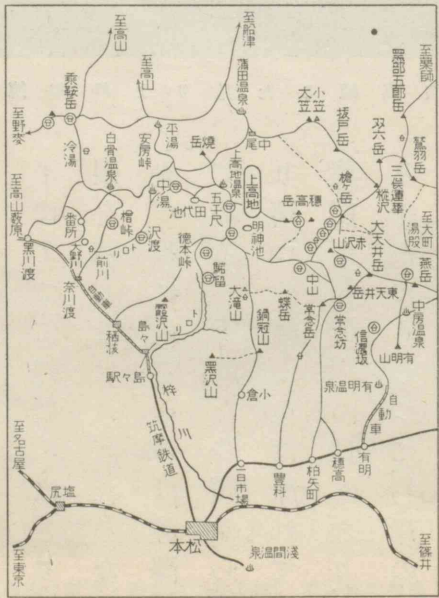
梓 椈

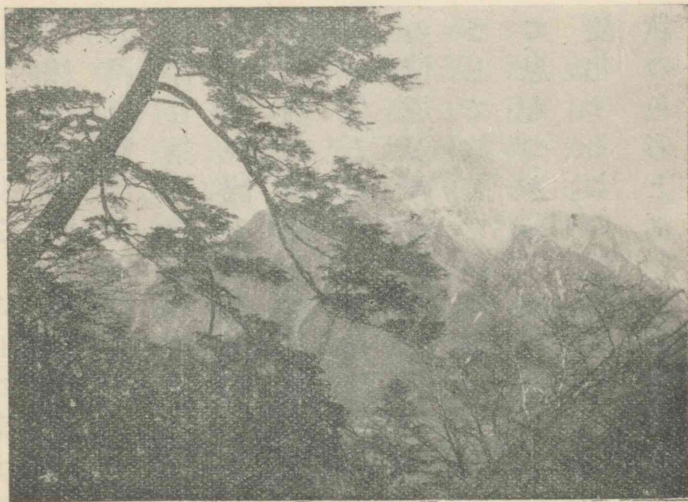
燒岳
上高地の西方にある
火山。

島々から四里の林道を登つて徳本峠の頂に出ると、白雪を戴いた穂高の秀麗な連嶺が俄然として現れ、常念山脈の豪宕な姿が、強い色彩で描かれてゐるのを見る。そして延長三里の上高地の高原は、整然とした木立の装で全溪谷を埋めてゐる一方を、梓川の清流が穂高の裾について白くうねつてゐる。二十町餘も下つて上高地に下りきると、溪聲があらこちらに聞えて、道は椈や落葉松や椈の淋しい林を分けて行くのである。穂高の氣高い姿と、落葉松や白樺のえもいはいはれない色彩と、清澄な梓川がその間をくゞつてゆつたりと流れる情趣とは、上高地峽谷の最も飽かぬ眺である。行手に燒岳の二筋三筋の寂しい噴煙を眺めながら、樹間を辿ること七八町で、温泉旅館の建物

霞澤岳
上高地の東南徳本峠
につづく山。

が現れて来る。梓川の流はこゝでは一際ゆるやかに、向岸の柳の林が次第高に、白樺となり、椈となり、落葉松となつて、やがては秀麗な霞澤岳と聳えて、清淨な景色を作つてゐる。その流るる水、川向うの柳の林、漂ふ雲、それらを見るだけでも無限の情趣が味ははれる。まして旅装を宿に解いて、息もつきあへぬ程に變化するこの溪谷の自然の色彩と活動とを眺めるならば、わが心の忽ちに淨化されて行くのを感じるであらう。

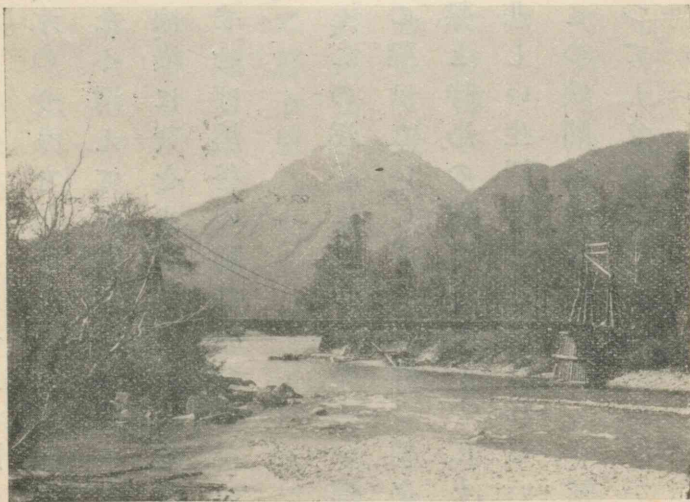




徳本峠より見たる穂高山

朝の上高地を味ははうとする者は、まだこの溪谷に朝日のさゝない五時頃、宿の欄干によつて梓川のほとりに眼を轉じなければならぬ。先づ眼に入るものは霞澤岳である。秀麗な峰頭から滴り落つる緑の色は、流れて針葉樹や闊葉樹の林となり、ゆるやかにうねつて、對岸の柳と白樺と落葉松のゆつたりとつゞく林となる。この林から川面にかけての一帯の

薄靄は、いまかすかに揺り動いてゐる。と見れば、雄偉な焼岳は、その東の半面を薔薇色に染めてゐる。噴煙は今しも眠から覺めたかの様に静かな曉の空へと立昇るのである。暫くすると、徳本峠から旭が昇つた。朝靄が溶けるにつれて、上高地一帯の溪谷が俄に銀のやうに明るい光を漂はせて、梓川の川面がきらきらと光つて来る。しかし



上高地の神祕境 (梓川及び河童橋・正面は岳)

河童橋
梓川にかゝる。

潺流

河童橋から徳本峠へかけて、密林にとざされた約一里の間の冷たい空気はまだ、温められずに、水のやうな流がその底を山裾に沿うて流れてゐる。霧はあとなく消えて、山膚の皺が残りなく現れた。見渡すかぎりの溪谷は、緑に黄をまぜて、霞が連嶺の八合目あたりを隠した。耳を澄ませば、溪谷の曉は静かだ、たゞ潺流の音が聞えるばかりである。

蟬

斷腸の思

だん／＼日があがる。しかし、この溪谷には、かしましい蟬の聲や、いつも聞き馴れてゐる鳥の聲はない。この溪谷の朝夕を通じて最も多く聞くのは、鶯の聲と時鳥の聲である。中にも時鳥の聲は、人は何處に住んでも悲しい生活から逃れられないといふことを告げるかのやうに、この峽間にも啼いて行く。繪を描く人や、そゞろ歩きの人が歸つてしまつて、その足痕のみが淋しく残つてゐる梓川の岸をさすらふ夕に、眞に斷腸の思あらし

鶉



物象

めるのはこの鳥の聲である。晝、二階の欄干にもたれて、屋根の上に餌をあさる鶉の姿を何心なく眺めてゐると、思ひがけぬ時鳥の聲、梓川の流聲に消えて行くのに、憂へ心地のふと誘はれるのも折々である。

上高地の美は、雨によつて殊に發揮されるのである。雨の上高地は、いままでの翠緑の溪谷をして、俄に黄金の色どりに變ぜしめる。雨の日、欄干によつて、霞澤岳から梓川の岸の柳の林にかけて、この溪谷の物象がいかに移り變るかをつく／＼と眺めよ。一條々々の雨のけぢめが、平地よりは一層明瞭なこの溪谷の雨は、先づ煙の様なしぶきを横になびかせる。梓川の岸の林は見るまに萌黄色がまさる。あたりの爽やかな空気は一層その度を増して来る。この時、溢れる温泉にとびこんで、窓から霞澤岳を眺めながら、空想に耽るのも興味が深い。やがて夕暮近

く雨が止むと、雲が盛んに動いて、霞澤の峰頭が時々雲間に立つ。が見渡す溪谷の底には靄が満ちて来る。ぱつと谷が明るくなつた。しかし、それは靄が晴れたのではない。夕日が靄にうつつたのだ。この時のこの溪谷を充たす色彩の美しさは、平地の朝夕のみを知る人々に、どうして想像できよう。湧きかへる溪谷全部の卵黄色——これがその靄の色をあらはす極めて不十分な言葉である。

上高地の急激な雷雨に経験のある人は、その光景を更に印象的な物の中に數へる。その起るや極めて咄嗟である。忽ちにして霞澤岳の峰頭が濛々と煙ると、はや殷々たる雷聲が全溪谷を震撼する。火柱が山の頂から林にかけて立つ、無数の雨脚が雲を貫いて一齊に溪聲の鳴りを止める。暫くして明るさが増し、雲がきれ々になつて、日光が洩れて来る。すつかり霽れ上つ

咄嗟

震撼

霽

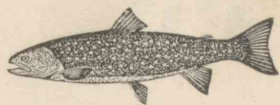
貪

追分
松前
松前節

た後までも、二片三片の雲が、柳の林に歸途を忘れてさまようてゐる。そして雨の後の林の色は萌黄にゆらいで、今にも樂の音となつてとけ出しさうである。

日中の上高地は珍らしい温泉場の光景を呈する。昨夕迎へた幾十の人々、それらは何處へ行つたであらうか。或人は湖水のほとりへ、或人は穂高の眺を貪らうとして河童橋の附近へ、或人は槍ヶ岳へ、そして或人は梓川の岸に竿を携へて往つてしまふ。この時はこの温泉のもつとも閑暇な時である。女中は洗濯をする。男は掃除をする。残つた二三の客は縁側に日なたぼつこをしながら、梓川の流のまに心^{こころ}を泛かべる。美しい鄙歌の聞えるのは女中のすさびである。追分や松前や、幾百年の人の愁情も、この溪谷の清寂な自然の姿にふれて、一層哀愁の氣を帯びて来る。

岩 魚



夕暮、宿の前にたゞずんでゐると、時鳥の聲が頻りにうしろの林をさまようてゐる。宿の後ろから流れて来て、浴槽の傍で淀んでゐる流に、岩魚を釣る客が二三人糸を垂れてゐる。徳本峠の方を見ると、柳と榎との林から人夫がやつて来る。洋服の人が来る。若い學生が来る。外國人が来る。そしてこの溪谷へ入るどの人もが懐くところの希望に、嬉々とした顔色を泛かべて来る。これらの人々が著くと、宿の玄関は急に忙しくなる。草履の音が廊下にやかましい。浴槽に話聲が高まる。

月夜の上高地は、想像しただけでも美しい。月の上らぬ前に、先づ霞澤一帯の峰が明るみを帯びて来る。暫くすると白い太い光が、白銀の矢のやうに斜に谷を越えて、穂高の連峰にそゞぎかゝる。それから漸く月が山の端を出る。その月は、夏でありながら、平地で見る十月の色である。谷の底の流も林も薄靄に

せゝらぎ

峰 巒

浄 化

包まれて、美しい光の衣をかける。かういふ夜のもの静けさ。雨戸を引かない部屋には、秋かと思ふ月の光がさしこんで、唯隣室の鼾聲とせゝらぎの音だけが枕元に落ちる。この時、人は、自分といふもののさゝやきが、今まで氣づかなかつた姿で現れて来るのを感じる。月の夜の朝、私は相變らず欄干にもたれてゐると、隣室のフランス人が、昨夜は誠に結構な月でした。」と、日本語で話しかけた事があつた。

十月になると、四圍の峰巒に白い斑雪が見え初め、穂高から梓川にかけて、身ぶるひのするやうな白く冴えきつた雪溪が出来る。その時、自然は上高地を更に、浄化させて、人間をよそに、その壯大なる美觀をほし、まゝにすることであらう。

(日本アルプスと秩父巡禮)

若山牧水
名は繁、宮崎縣の人、
歌人、昭和三年歿、
年四十四

醗 酵

一七 静

観

若山 牧水

歌が作りたいたいといふ氣持がして、さて作る手蔓を得るに苦しむ場合がある。その時には、手帳を懐にして戸外に出るがよい。作りたいたいといふ一種の醗酵した氣持の時、眼に觸れるものは、大抵作歌の材料となり得るものである。昔の歌などでは、「何の歌を作る。」といふ事がまづ問題であつたやうだが、新しい歌では、「何の」といふ事は殆ど問題にならぬ。即ち材料は何でもよい、ただ作る人の心それ自身が問題となるのである。「何の歌は問題ではないが、どう詠むか。」どんなに詠むか。」が問題である。詠む態度と詠む技巧とが主となつてゐるのである。それで、詠みたいといふ心が萌してゐる時には、餘り材料に選り好みをしてゐないで、まづその詠みたい心を満足させるまで、手當り次第に

歌 碑

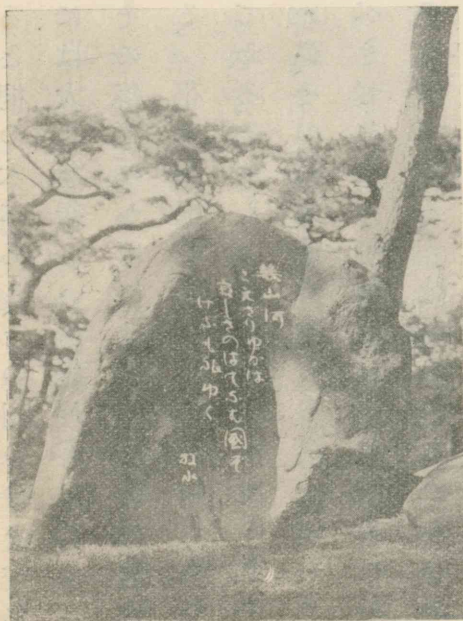
幾山河こえさりゆかば
寂しさのはてなむ國ぞ
けふも旅ゆく 牧水



水 牧 山 若

園の花つぎつぎに秋に咲きうつる
このごろの日の静けかりけりぬ水

筆 水 牧 山 若



(内園公津沼) 碑 歌

蟻

作るがよい。門を出ると桐の木がある、その桐の白い幹を詠むもよい。桐の根もとには大きな新しい枯葉が落ちてゐる、その落葉を詠むもよい。その落葉のかげには白い草花が咲いてゐる、それも十分歌になる。花のかげの地は、かすかなしめりを帯びて、朝の日影を受けてゐる、それもよければ、その地の上をはつてゐる小さな名もない蟲、その蟲を追つてゐる蟻といふやうに、心のまゝに詠み進むべきである。何を詠んでよいかわからなといいつてくるしむのは愚^{トウ}である。詠みたいといふ心が出れば、——それはなか／＼貴重な心である。——その心の消えぬうちに、何でもまづ詠むべきである。室内でも大抵の材料には事を缺かぬものであるが、若し室内にゐてその材料に困つたら、前に述べたやうに、室外に出かけるがよい。そして静かに眼の前のものに心を留めて、一首々と詠むがよい。

また、その詠みたいといふ心を誘ひ出すべき必要のある時もある。即ち、その下地はあつても、まだはつきりと詠みたいとまで心のまとまらぬ時がある。そんな時にも、私はこの「戸外に出てよ」と「寫生」とを勧める。

まづ「ものを静かに観よ。」と、私はいひたい。門に續く杉垣の嫩芽、その側に立つて静かにそれを視つめてゐよ、心は次第に洗はれてくるに相違ない。疲れた心には微な活氣を感じはじめ、鈍い心には次第に感觸が生じ、視る眼を通して、心は知らず識らず新鮮になつてくるものである。さうして、捉へどころのなかつた、まとまりのなかつた心に、次第にまとまりがついてくる。心の目があいてくる。そこで、「詠まう。」と思ひ立つて見れば、大抵はできるものである。私が「物を静かに観よ。」といふのは、いはば一の精神集注の法である。單に、かうして心をまとめる爲

ばかりでなく、一步進んで、眼で見るまゝを一首にまとめようと努めて見よ。さうしてできたのが、必ずしもいゝ歌だとは行かないが、ものを観る眼を養ふ爲に、見たまゝを歌に詠む練習をする爲に、初めはさうするのがよいと思ふ。

歌といふと、大層むづかしいもののやうに固くなる癖があるが、それはいけない。平かに、静かに、常にその心を澄ませて置いて、眼の前の草にでも、小鳥にでも、徐にものをいひかける氣持で作れば、易々と作れるものだ。「氣を變へる。」「心を新しくする。」といふ事は、作歌の上には大切な事である。机に向つて考へ倦んだ際など、ぶらりと戸外に出て冷たい風に吹かれると、先に頭の痛くなる程考へこんだ時には、どうしてもできなかつた微妙な歌が、殆ど無意識に心に浮かぶ事などもある。何か用事のある時など、急いで路を歩きながら、あとから／＼と歌のできる事

趣向

もある。で、歌心のある人は、ちよつと出るにも、手帳に鉛筆をば放さないがよい。ひよつと心に浮かんですぐ消えて行くやうな歌に、なか／＼棄て難い佳作がある。歌は、その歌はれた材料や趣向よりも、その言葉その調子が常におもなものであるから、ひよつと心に浮かんで消えるといふ歌などをば、そのできたときどきに何か記して置かないと、初め自然に心から漏れて來た微妙な調子をば、すぐ逸してしまひがちのものである。かういふ趣向の歌であつたがと、その歌の筋をばあらまし覺えてゐても、それは多くは役に立たない。筋だけでは、最初心に浮かんだ時の微妙な心持がなか／＼出ない。その心持は、大抵言葉や調子の上に含まれてゐるからである。散歩の時に限らず、夜床に就いてから、思ひがけず歌のできる事などもある。そんな時には、すぐ起き上つて紙筆を用意すべきである。明朝起きてか

らなどと考へてゐては大抵失敗する。

散歩はまづ一人の方がよい。雑念を除いて徐に歩む。歩むにつれて心は次第に統一されてくる。さうした時、初めは少し無理でも、一首二首、眼前の物を何でも材料として詠んでみるがよい。はじめその一二首の間は、一向おもしろくなくとも、さうして續けてゐる内には、我知らず感興が湧いて、いつか本氣になつて作られるものである。散歩毎に必ずさうとは行くまいが、多くはさうなり易い。いつの間にか、またさうした癖もつくものである。はじめは努めてやつて見なくてはだめかも知れないが、とにかく實地にやつて見るがよい。

旅行は散歩の大なるものである。汽車の窓、汽船の室、またはぶら／＼と山を越えながら、次第に移り行く大きな景色を眼にしてゐると、努めずとも作りたくなるのが當然であらうが、さう

強ひて

でなくとも、前にいつたやうに、最初二三首強ひて作つて見ると、自然にそれにさそはれて作りたくなつてくるであらう。また繪葉書や手紙の端などに、何の氣なしに書きつけて出した歌に、極めて自然な佳い作を見る事もある。

散歩にせよ、旅行にせよ、餘りに心を騒がせてはいけない。餘

昂

抑へる。

りに思ひ昂つてはいけない。自然に湧き上つてくる感興をも力めて抑へるやうにして、靜かに一首二首と詠んで行くべきである。作者自身餘りに興奮してしまふと、できる歌は極めて粗雑な概念的なものになり勝なものである。どうかすると、ゐても立つてもゐられないやうな興奮を覺える事がある。私もをりをりさういふ場合に出會つた。或時は、宿屋の二階で、ちつと坐つて手帳に歌を書きつけてゐられないで、立上つて部屋中をそろ／＼と歩きだしたけれども、力めて自分自らの興奮をかみ

概念的

秩父
埼玉縣秩父郡、海拔
五〇〇米以上の山が
多い。

味はふやうな氣持で、稍、遠くに置いて眺めるやうな氣持で、手ではさるのも恐ろしいやうにして、その感興を守りながら、三首五首と作つて行つた。或時は、秩父の奥の溪間を歩きながら、これは三日間にわたつて續いた感興を守りながら、詠み耽つた事もある。こんなにして歌ができたすと、自分ながら神々しい氣に満たされて、自分自身の事も、なかくかりそめにはあつかひ得ないものである。昔の言葉に、歌人は、ゐながらにして名所を知る。」といふのがある。これは、優れた歌人は、直覺で以て、まだ見ぬ遠い地の景色をも知る事ができるといふ風にも解せられるが、事實はさうでなく、概念で以てその景色を想像し、そしてそれを歌に詠み得るといふ事に當るらしい。甚だよくない言葉である。世に名所と歌はれてゐるやうな大景を、概念で歌はうとしたところで、到底できるものではない。やはり實地に見て、實

際に感じたところを歌はなくてはならぬ。

また初心の人は、何でも大げさに歌はなくてはならぬものと考えへる傾がある。これは歌といふとすぐ固くなるのとほゞ同じで、景色の歌を詠むとすれば、絶景佳景でなくてはならぬやうに思ふ癖である。これも大變に間違つてゐる。前にもいつたやうに、歌に詠むに材料は問題でなく、常に作者の心が問題であるのだ。作者の心がよく澄んでよく張つて居れば、即ち十分に感動が發して居ればよいのである。だから、感動もなくして強ひてこしらへた富士山の歌よりも、十分な感動を以て詠んだ名もない丘の歌の方によいのである。景色がよいのに心を動かされたから、佳い歌ができたといふのなら、當然だが、景色のよい所が詠んであるから佳い歌だと決していふ事はできない。心すべきである。

(短歌作法)

一六 父 君 よ

落合 直 文

父君よけふはいかにと手をつきて問ふ子を見れば死な
れざりけり 馬病如行んと 死なれども

正岡 子規

天の下しらす日の御子その御子の生れまし、日は常晴
にして 天長命

伊藤 左千夫

よき日には庭にゆさぶり雨の日は家とよもして兒等が
遊ぶも 人並み

長塚 節

すずめ鳴くあしたの霜の白き上に静かに落つる山茶花
の花

島 木 赤彦

まばらなる冬木林にかんくと響かんとする青空のい
ろ

齋藤 茂吉

ゆらくと朝日子あかくひむがしの海に生まれてゐた
りけるかも

佐佐木 信綱

ゆくあきの大和の國の薬師寺の塔のうへなる一片のく
も

金子 薰園
牛のゆく白川みちの水車かたりことりといとまあるかな

尾上 柴舟

つけすてし野火のけむりのあかくとみえゆく頃ぞ山はかなしき

若山 牧水

見上ぐれば十丈じゅうじょうにあまる大杉の暗きこずゑこずゑ雨たり來る

（下）

石川 啄木

たはむれに母を背負ひてそのあまりに輕きに泣きて三歩あゆまず

北原 白秋

不盡の山れいろうとしてひさかたの天の一方に立てりけるかも

太田 水穂

木 おほけなき力とおもふ風の吹き絶えてなほうごくこ槻の

窪田 空穂

春の雨降るとは見えぬ檜葉の草に雫たまりて靜かにこぼる

前田 夕暮

木の花はうす黄に咲きて春山ははだらはに雪解しにけり

夕暗き大堂の傍そばをとほりたり大杉をもりていちじるき
雨 (比叡山)

中村 憲吉

遠かたの鍛冶屋かねうつ音すみて秋やうごく八月の
すゑ

木下 利玄

さ庭べの冬青もぢの木の花少しづつたえずこぼれて静けく
ありけり

川田 順

莖赤きゆづり葉うづめたわくとゆたかに降れる山の
白雪

與謝野 寛

一九山吹の

四方赤良

四名は太田覃、號は南畝、蜀山人、江戸(東京市)の人、徳川末期の狂歌師、文政六年(一八二五)歿、年七十五。

握拳

山吹のはながみばかり金入に
みの一つだになきぞ悲しき
さわらびが握拳をふりあげて

山の横面はるかぜぞ吹く
ほとゝぎす啼きつる跡に呆れたる

後徳大寺のありあけの顔

宿屋飯盛

宿屋飯盛

本名は石川雅望、江戸(東京市)の俳人、狂歌師、天保元年(一八三〇)歿、年七十八。
唐衣橋洲
本名は小島謙之、江戸(東京市)の狂歌師、享和二年(一八二二)歿、年六十。

歌よみは下手こそよけれ天地の

動きいだしてたまるものかは

唐衣橋洲

鯛屋貞柳 榎並氏 大阪の俳人、享保十九年(一七四四)歿、年八十二。

つむり光 本名岸誠之、江戸(東京市)の狂歌師、寛政八年(一七九六)歿、年四十三。

鹿都部眞顔 本名は北川嘉兵衛、江戸(東京市)の狂歌師、文政十二年(一八〇一)歿、年七十七。

栗柯亭木端 大阪一向宗某寺の僧、貞柳の高弟、安永二年(一四三三)歿、年六十四。

菜もなき膳にあはれは知られけり

しぎやき茄子の秋の夕ぐれ

鯛屋貞柳

富士の山夢に見るこそ果報なれ

路銀もいらす草臥もせず

つむり光

ほとゝぎす自由自在に聞く里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

鹿都部眞顔

争はぬ風の柳の絲にこそ

堪忍袋縫ふべかりけれ

栗柯亭木端

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしては暮されもせず

大屋裏住

鶯も蛙もおなじ歌なかま

経よむもあり歌よむもあり

柄井川柳

大屋裏住 本名は久須美、通稱白子屋孫左衛門、江戸(東京市)の狂歌師、文化七年(一八〇〇)歿、年七十七。

柄井川柳 通稱八右衛門、名は正通、江戸(東京市)の人、川柳第一世、寛政二年(一四九〇)歿、年七十三。

嘘

将棊

講釋師見て來たやうな嘘を吐き
まけ將棊逃げるたんびにお手に何
芭蕉は飛び込み道風は飛び上り
居候三杯目にはそつと出し
元日や昨日の鬼が禮に來る

吉田松陰

名は矩方、通稱は寅次郎、長州(山口縣)萩の藩士、幕末の志士、安政六年(二五九)歿、年二十九。

二〇 忠魂義魄

吉田 松陰

平生の學問淺薄にして、至誠天地を感格する事出來不申、非常の變に立到り申候。嗚々御愁傷も可被遊拜察仕候。

親思ふ心にまさる親心けふの音づれ何と聞くらむ

乍去、去年十月六日差上置き候書跡より御覽被遊候は、左まで御愁傷にも及び申間敷と奉存候。尙又當五月出立の節、心事一々申上置き候事につき、今更何も思殘候事無御座候。此の度漢文にて相認め候語諸友書も御轉覽可被遊候。幕府正議は凡て御取用無之、夷狄は縦横自在に御府内を跋扈致し候へども、神國未だ地に墜ち不申、上に聖天子あり、下に忠魂義魄充々致し候へば、天下の事も餘り御力御落無之候様奉願候。隨分御氣分御大切に被遊、御長壽を御保可被遊候。

以上

去年

安政五年(二五八)

當五月

安政六年(二五九)五月二十六日萩城出發。

夷狄 跋扈

十月二十日認置

寅二郎百拜

家大人膝下

玉丈人膝下

家大兄座下

家大人

松陰の實父杉百合之介。

玉丈人

松陰の叔父玉木文之進。

家大兄

杉民治。

誅

兩北堂様隨分御氣體御厭ひ專一に奉存候。私被誅候とも首にても葬り呉れ候人あらば、未だ天下の人には棄てられ不申と御一笑奉願候。兒玉小田村久坂の三妹へ、五月に申置き候事忘れぬ様御申聞奉願候。吳々も人を哀まんよりは自ら勤むること肝要に御座候。私首は江戸に葬り、家祭には私平生用ひ候硯と、去年十月六日呈上仕候書とを神主と被成候様奉願候。硯は己酉の七月か、赤馬關廻浦の節買得せしもの、十年餘著述を助けたる功臣に候。

松陰二十一回猛士とのみ御記し奉願候。

己酉

嘉永二年(二五〇)

赤馬關

山口縣豊浦郡下關海峽の北岸

徳富蘇峰

名は猪一郎、熊本縣の人、文久三年(三三三)生、評論家、歴史家、青天の霹靂

二 乃木大將の殉死

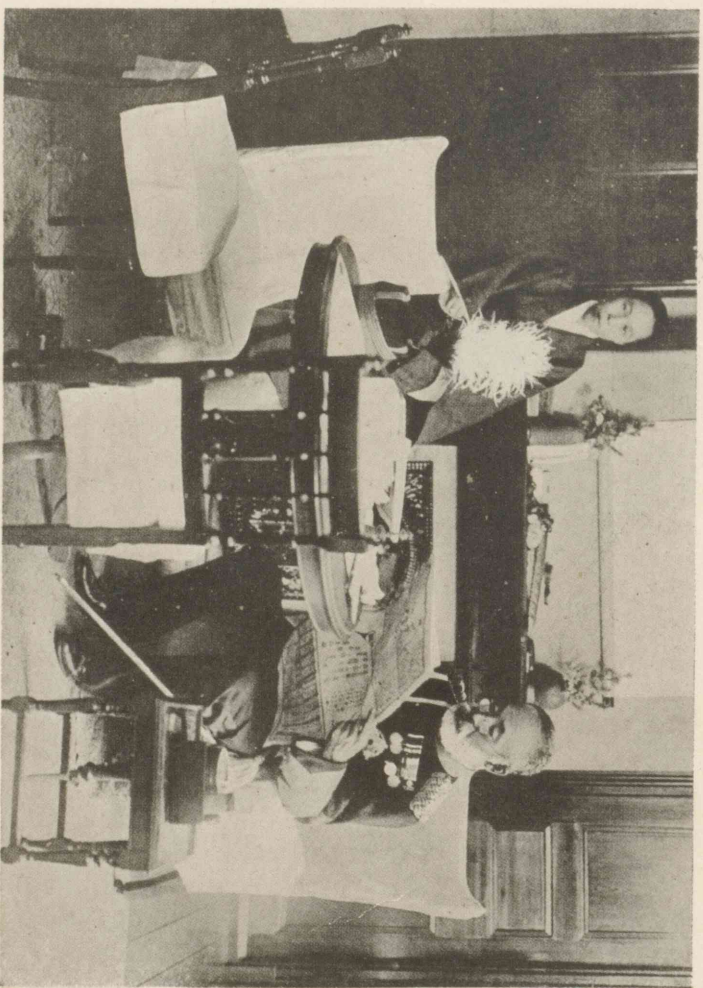
徳富蘇峰

一大鐵槌

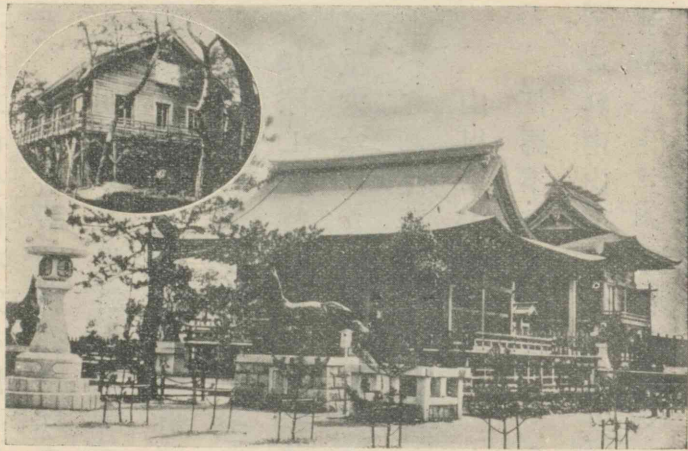
身を挺す

誣

乃木大將の自殺は、深夜の警鐘の如く、青天の霹靂の如く、多大深甚なる印象を天下に與へたり。苟も心ある者はみな自己に與へられたる一大鐵槌として、これを受用するを禁ずる能はざりき。しかれども、乃木大將自殺の目的こゝに存したりとするは、これ決して大將の本意ならじ。恩賞は功勞に伴ふ。然れども恩賞を得んがために、身を挺して君國に奉じたりといはば是忠臣義士の心を商賣根性視するものなり。大將の一死を、われに善用し、國に善用し、世道人心に善用するは吾人の責任なり。されど、後人に教訓せんが爲に、時世を警醒せんが爲に、汚風惰俗に大鐵槌を下さんが爲に、特に自殺したりといふに至りては、乃木大將の心事を誣ふるも亦甚し。



妻夫將大木乃の日當去薨



伏見桃山乃木神社と東京赤坂乃木邸殉死の家

吾人の所見によれば、乃木大將の自殺の理由は、其の遺言書の第一條に於て盡くしたり。曰く。

自分此度御跡を追ひ奉り自殺候處恐入候。其の罪は不輕存候。然る處明治十年役に於て軍旗を失ひ、其の後死處得度心掛候へども其の機を得ず。皇恩の厚きに浴し、今日迄過分の御優遇を蒙り、追々老衰最早御役に立ち候時も無餘日候折柄、此度の御大變、何とも恐入候

乃木大將の遺言書

聚訴

三棺

黯然

暗涙萬斛

次第、茲に覺悟相定め候事に候。

と。大將自殺の行徑や此の如く明白なり。其の心事や、此の如く光明なり。豈紛々聚訴の餘地あらんや。

吾人はこゝに大將の事歴を説くの煩を必要とせじ。大將は事ある毎に、其の死處を尋ねたるを知れば足る。三十七八年戦役に際し、大將は第三軍の將として出征したり。其の責任や實に重大なりき。二兒と共に家を出づるに當りて、大將は三棺を並べざれば葬送する勿れと、家人を戒めたりといふ。

山川草木轉荒涼。十里風腥新戰場。

征馬不前人不語。金州城外立斜陽。

これ南山役後の作なり。無心にしてこれを讀む、尙黯然たらざるを得ず。況んや此の時に於て、大將は其の一兒を失ひたりし事實を知るものは、大將の胸中の暗涙萬斛なりしを察して、自

壓搾

乃木希典筆

皇師百萬征三強虜。野戰攻城屍作山。愧我何顏看父老。凱歌今日幾人還。

希典 示佐々木行忠君

ら泣かざらんとすとも能はざるべし。大將は本來多恨多情の質なれども、武士道の鍊磨によりて、剛腸の武夫たりしなり。日本武士道の精華は、感情を發露するにあらずして、これを壓搾するにありき。一首二十八字、字々これ血淚の結晶なり。

皇師百萬征三強虜
野戰攻城屍作山
愧我何顏看父老
凱歌今日幾人還

示佐々木行忠君

乃木希典筆

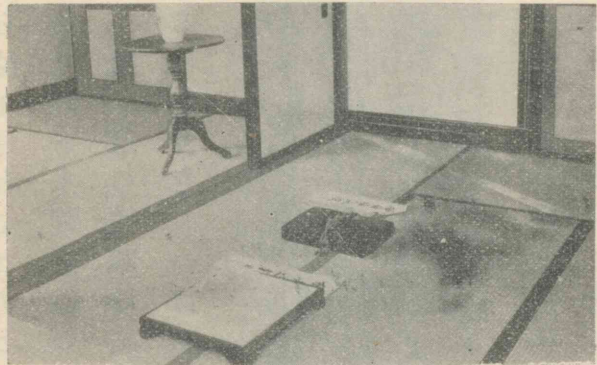
旅順攻圍軍は古今未曾有の慘烈なる經驗を嘗めたりき。中隊大隊さては聯隊

の全滅さへ繰返されたり。而して豫期より半歳を超過して、漸く開城を見るを得たり。大將は此の役に於てまた他の一兒を失ひたり。此の如くして二棺は豫期の如く出來たり。他の一棺は如何。

強 虜
屍 凱
歌

一將功成
一將功成リテ萬骨枯
ル。(唐の曹松の句)

結 髮



(痕血の妻夫御は點黒の墨) 室の死殉

皇師百萬征強虜
愧我何顏看父老

野戰攻城屍作山
凱歌今日幾人還

大將は實に一將功成萬骨枯の事實を痛感したり。鋭敏なる良心責任心廉恥心はまたもや大將を驅りて幾回か自決せしめんとしたり。されど大將は餘儀なく徐に其の死處を待ちたり。

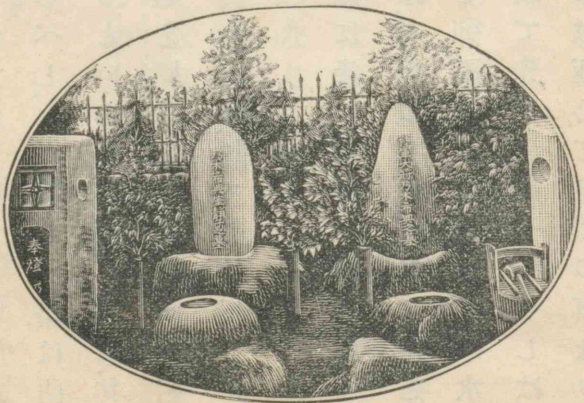
三十七八年役以後の大將は、殆ど軍服を纏うたる聖僧なりき。然も獨善はその屑しとする所にあらず。大將は結髮以來、尊王愛國の大義を聞き、治國平天下の大道を學びたり。而して

擢 用
明 鑑
適材適所

鑑獎嘉諒

滔々たる世潮に對して、固より没交渉たる能はざりき。及ぶ限りこれを矯正し、躬ら行ふ所を以てこれを及ぼし、以て大義大道を支持せんとしたり。大將を學習院長に擢用し給ひたるは、先帝の明鑑にして、眞に適材を適所に置きたるものといふべし。

三十七八年戰役以來、孤獨なる家庭、淡枯なる生活中に表したる自損利他の行徑、奉公獻身の精誠は、深く先帝の鑑獎嘉諒し給ふ所となりたり。嘗て大將を擧げて、軍職に大用



墓の妻夫將大木乃

知遇
辱うす
鞠躬盡瘁

せんと議を上りしものありしが先帝は固く執りてこれを容
し給はざりきと傳ふ。畏けれどもこれ大將を以て人の師表た
るべきものと御推信ありしが爲なるべし。大將の進路は曲折
あり頓挫ありて決して和易輕快なりといふを得ず。然も其の
晩節に於てかくまでに聖天子の知遇を辱うす。大將が鞠躬盡
瘁、老の將に至らんとするを知らざりし心事、以て察すべきにあ
らずや。

いさ知らず

然るに此の人にして先帝の御大患に逢ひ、崩御に逢ひたり。
思ふに、大將は代らるべきものならば、身を以て代り奉らんと祈
りしならん。最後まで確持したりし御平癒の希望は終に水泡
に歸したり。こゝに於てか、一死を以て先帝に殉じ奉りしは、餘
人にありてはいさ知らず、大將に於ては極めて自然の事なり、尋
常の事なり。毎に求めてやまざりし死處は、こゝに偶然に發見

奇を衒ふ

せられたるなり。名を求むるにあらず、奇を衒ふにあらず、況や
他人にあてつくるが如きは、大將の夢想だにせざりし所なり。

ゆくなり

み跡慕ひて我はゆくなり

心事は唯此の如きのみ。蓋し乃木大將は先帝に殉じ、大將夫
人は大將に殉じたり。大將夫妻の死は、宛も先帝大喪儀の最も
壯嚴悲哀なる諫歌を合奏したるものなり。此の如くして豫期
せられたる三棺は、豫期せられざる機會に四棺となりぬ。乃木
家閨門、皆國事、王事に斃れぬ。明治大正の過渡に於ける、血を以
て描ける千古不朽の一大悲史は、此の如くして出て來れり。嗚
呼哀しいかな。

(蘇峰文選)

喪儀
誄歌
閨門

ものあはれ

齒徳

遜讓

痛痒

なりなむ

三 仁は心のいのち

心に仁あるは、人に元氣あるが如し。人の元氣は脈に現れ、心の元氣は愛に現る。脈の通ひ絶ゆれば人死する如く、愛の理滅ぶれば心死するほどに、仁は心の命とも申すべし。それ、心は活物なるにより、人に情あり、ものあはれを知りて、常に生きたるものぞかし。よりて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長を見ては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒徳を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞いては必ず感ずることを知り、不義を聞いては必ず恥づることを知る。若し情なく哀を知らずば、その心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さも知らずなりなむ。何をもて自愛し、何をもて恭敬せむ。義を聞いて感ずることなく、不義を聞いても恥づることなかる

物語こそ候へ

天徳寺

豊臣時代の武将佐野了伯のこと、慶長六年(三二)歿、年四十四

佐佐木四郎高綱

源頼朝の臣、宇治川の戦に梶原景季と先陣を争った

雨雫と泣く

那須與市宗高

源義經の臣、屋島の戦に扇の的を射落した

べし。これをもていふに、仁義禮智いづれも心の徳にして、各その理わかるれども、その本源は仁に外ならず。人として不仁なれば、義も、禮も、智もそのさまあり、その用ありといへど、所詮内より生ぜねば、眞の徳にあらず、公の理にあらず。この故に仁に心の徳といひて、外に徳をいはず、仁に愛の理といひて、外に理をいはず、そのいはざるところに深き意ありと知るべし。

それにつきて、一つの物語こそ候へ。相州北條の幕下、佐野の城主天徳寺、豪健の勇將なりしが、或時琵琶法師を招きて、平家を語らせて聴きけるに、未だ語らぬ先に琵琶法師にいひけるは、某はたゞ哀れなることを聴きたくこそあれ。その心得して語り候へ。といへば、法師「心得候。」とて、佐佐木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天徳寺哀がりて、雨雫と泣きけり。さて、今一曲前の如く哀れなることを聴きたし。といへば、那須與市宗高

いかが聴きつる

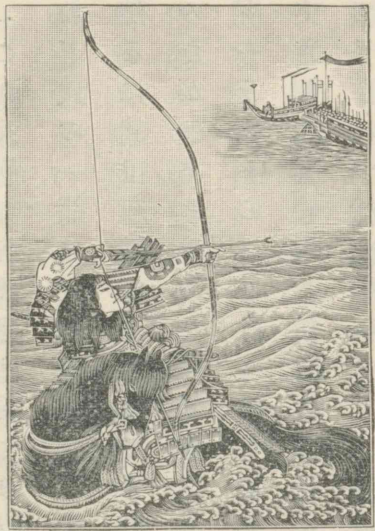
蒲冠者
頼朝の弟範頼
梶原
梶原景季。
哀れならぬことかは

が扇の的を語りけるに、平家半ばより、天徳寺また落涙數行に及べり。後日に家臣の輩に、過ぎし日の平家はいかが聴きつる。といふに、家臣ども、最もおもしろきことにて候。但し我等ども一つ心得ぬことこそ候へ。前後二曲共に勇烈なることにて、哀れなる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候。これはいかゞのことにて候にや、今に不審なることにいづれも申し合ひ候。といへば、天徳寺驚きて、たゞ今までは各をたのもしく思ひ候ひしが、今の一言にて、さてく力を落して候。まづ佐佐木が先陣をよく合點して見られ候へ。頼朝、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生唆を、高綱に賜はるにあらざや。さればそのかひもなく、この馬にて宇治川を先陣せずして、人に先を越されなば、必ず討死して再び歸るまじと、頼朝に暇乞して出でける、その志を察して見られよ。哀れならぬことか

名折れ

葛飾北齋
通稱中島秀一、徳川末期の畫家、嘉永二年(二〇七)歿、年九十。

武邊



那須與市 (葛飾北齋筆)

は。」とて、屢涙を拭ひつゝ、暫しありていひけるは、また、那須與市も大勢の中より選ばれて、たゞ一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乗り入れて的に向ふに至るまで、源平兩家鳴りを静めてこれを見物するに、若し射損じなば、身方の名折れたるべし、馬上にて腹搔切つて海に入らんと覺悟したる心を察して見られ候へ。武士の道ほど哀れなるものは候はず。某は毎に戰場に臨みては、高綱宗高が心にて槍を取り候故、右の平家を聴くときも、兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに、各には哀れになかりしと申さるるにつけて思ふに、各の武邊はたゞ一旦の勇氣にまか

迷惑す

惻隱

油然
忍びざるの心
疑ひかあるべき

駿臺雜誌

五卷、室鳩巢の學術・
道德に關する隨筆、
室鳩巢一名は直清、
江戸(東京市)の人、
儒學者、享保十九年
(一七四四)歿、年七十七

せて眞實より出づるにてはなきにやと思はれ候。それにてはたのもしからずこそ候へ。」といひしかば諸臣皆迷惑して辭なかりしとなり。

これ、天徳寺が武邊は涙より出づれば、もとより仁者にはあらねど、武の一筋は仁に根ざして、惻隱の心より發するにあらずや。然るに武は殺獲のことにて、手荒き道なれば、いはば仁とは黑白のたがひあるやうなれども、仁より出でざるは眞の武にあらず。況やその餘のことは、なほもて知るべし。されば忠孝も禮儀も、文道も武道も、内より油然として潤ひわたりて發するにあらずれば、眞のものにあらず。これ即ち前にいひし人に情あり、もの哀れを知るの心なり。すべて諸の言行共に、義理に當りては悉く忍びざるの心より出でて、天徳寺が涙をこぼす様にだにあらば、これ心徳の全きなり。仁者といはん、に何の疑かあるべき。

(駿臺雜誌卷二)

遲塚麗水

名は金太郎、静岡縣の人、明治元年生、文章家

連翹の花



盈

ケーナリ

アフリカの西北海に
あるカナリ島が原
産地だといふ。

腫瘡

朝鮮の四季

遲塚麗水

朝鮮の春は、李の花でもなく、杏の花でもなく、梨の花でも、桃の花でもなく、無論櫻の花でもない。朗かに明るい鬱金の花をもつ連翹こそは、げに朝鮮の春を象徴する花である。京城なる李王家祕苑はいふまでもなく、通邑大都の門巷籬落、そこに黄金の色麗かな連翹の盈々たる細條、軽く軟風に吹きなびいて、嫩き春の光に陶醉するやうな風情に見えることによつて、はじめて春が來たといふ心を催させる。この國ではこの花を迎春花といふ。正しくその名にふさはしい。俗間ではケーナリと呼ぶ、その花の色が金絲雀に似てゐるので、しか呼ばれてゐるのであらう。金絲雀は徳川幕府の頃、朝鮮の信使が携へ還つたものであらう。土俗、この花と葉とを胡麻油に漬けて、腫瘡や毒蟲にさゝれ

白楊



鶻 嘯 噉



蒼翠 丘阜



(題詩 大湖畔) 春

た時に、塗抹して奇效があると傳へてゐる。
 朝鮮の夏はまさに白楊の夏である。水村山郭處として丈高
 き白楊の薫風に嘯噉してゐるのを見ないことはない。枝に鶻
 の巢を藏してゐるなどは、詩趣あり又畫趣あり
 といふべきである。私の始めて朝鮮に渡航し
 たのは、三十餘年前、征清
 役に從軍した時である。
 何處へ行つても童山秃
 丘、絶えて樹らしい樹に逢着することはなかつたが、今來て見れ
 ば、到る處翠草蒼丘、扶疎たる松の林さへ、その樹の既に拱するに
 餘りあるを見る。その白楊の殊に多き事は、この樹の成育、他の

併合

明治四十三年八月二十日

蕃椒 郊墟



大蒜



木に比すれば最も速に、五年にし
 て屋根の垂木となすに足り、十年
 にして棟梁となすに堪ふるに見
 て、併合當初の有司は、特にこの木
 の栽植を奨励したものであらう
 と思はれる。
 秋の朝鮮は、正に蕃椒の秋と言
 ふべきである。金風郊墟に入る
 の時一度城外におとづれると、村
 家の草葺屋根の上、殷紅、火よりも
 あかいこの蕃椒の一面に並べ乾
 されてあるを見る。支那人が蕃
 大蒜を嗜むがごとく、朝鮮人は更



(ひこいの蔭樹) 夏

硃 酣

燧 石



(業作の庭中) 秋

に尤も蕃椒を嗜む。料理にも香の物にも、この物なければ旨しとしない。落日、山にあり、反照雲を爛らす時、水村山郭、一様農家の屋根に乾されたこの蕃椒の紅酣し、硃燃ゆるの光景は、誠に綺麗な眺である。内地には昔、この物なく、この物あるは豊公の征韓役後より始まるといふ。正しく出征の武士が、その種子を燧石袋の中に收めて持ち還つたものであらう。さればこれを唐辛といひ、更に又高麗胡椒ともいふ。昔内地の飛脚が深雪のうちを行く時、こ

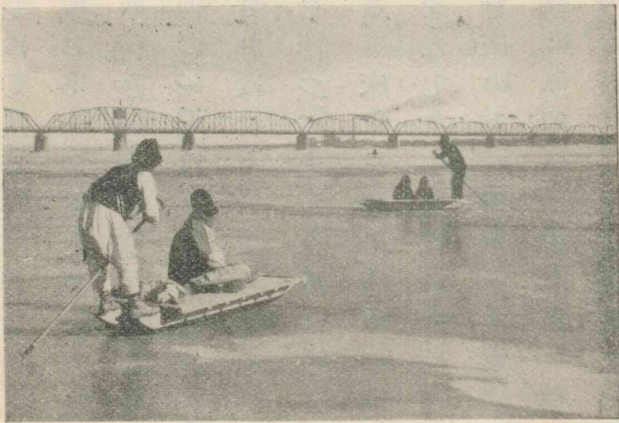
攘

纒 象 徴

煦 *

の物を足袋のうちにに入れて凍傷を防いだといふくらゐ、烈寒の地に生を寄せてゐる人たちは、この物を食うて寒氣を攘ふといふ自然の要求から、その嗜好を成したのであらうと思はれる。

明治節時分になると、麥酒が凍つて纒が破裂するといふほど寒威の猛烈な朝鮮には、冬を象徴する何物をも持たないことは心寂しい。強ひてこれありとすれば、彼の温突オチである。李王家の宮殿は勿論、庶民の家にも必ずあつて、冬眠の人に煦々



(氷結の江縁鴨) 冬

竇道
竈
炊爨

褥
硃
煖爐
ペーチカ
ロシア式の煖爐



の春を輸すのである。家の床はすべて泥土で築造される。その床を作らうとする当初から、螺線型に又山路形に、若しくは巴様に、三升形に、古來からの傳統や、自家の多年經驗し來つた工夫の施設のもとに、遍く床の面に温氣の行きわたる様に竇道を設け、竇道の一端は、壁外の煙突に通じ、他の一端は土間に据ゑた竈の奥に連結させて置くのである。されば日夕炊爨するその火氣は、竈と共に榮螺の殻の如き竇道を傳つて土床を温め、やがて屋外の煙突より放散されるのである。床には煙の室内に漏れ出づるを防ぐ爲に、紙をもつて目張をなし、その上に朝鮮油團を敷く。庶民の多くは褥も敷かず、固き床の上に胡坐し、奇寒膚に硃するやうな冬の夜にも、一枚の煎餅蒲團、薄い小夜具の一襲を被りて臥するのみである。移住の内地人は多くは煖爐又はペーチカを置いて防寒の用意をなせど、中にはやはり朝鮮風の温

志賀矧川
名は重昂、愛知縣の人、地理學者、昭和二年歿、年六十五。
饗應

美慵
神仙爐



面晤

突室も造つてゐる。京城その他都會の内地人向きの貸家は、その一室には必ず温突の設備があるやうになつたといふ。東京でも、曾て亡友志賀矧川氏が、代々木の邸の一室を温突式となし、年の暮、その温突開きの當夜、知人數輩を招いて朝鮮料理を饗應したことがある。私も亦招かれた客の一人であつたが、折からの微雪、窓邊の竹に洒いで、寒さの殊に酷だしい宵ではあつたが、坐間には唯喫煙用の煙草盆があるのみで、絶えて火氣のなかつたに拘らず、和やかな温氣は危坐の膝を煖めて、人をして覺えず睡を催さしむる美慵を感じた。さてくさぐさの料理の出た後、最後の神仙爐を圍んだ時には、温か過ぎて、額に薄汗の泌み出づるを覺えたほどであつた。文筆に携はる人の讀書述作の室か、若しくは閑時閑客と面晤する閑房としては、誠に妙といふべきであるが、邦人の習慣より言へば、温突室には久しく居るべから

懶惰



二百五十韓里
日本の約百軒
蒸餾

訝 們

ざるものであらうと思ふ。朝鮮人の懶惰の習性は、或はこの温突あるが爲であらう。私は曾て平壤大戦を觀ての歸途、黄州から南首陽山を踰えて海州より汽船、仁川に歸つたことがある。當時年少、二百五十韓里を一日半をもつて踏破した。夜中、銀波の河を徒涉し、とある河畔の客舎を叩き、水に濡れた服をも脱がず、行旅の朝鮮人たちが雜然として枕藉してゐる温突の室に入つて夜の明くる間の少睡を取つたが、やがて悪夢に魘はれたやうに驚き覺めると、さながら新たに蒸餾の中より出てたる甘藷のごとく、白氣濛々として満身より立ち昇り、流汗膚に遍く堪ふべからざるの奇痒を覺えた。傍に臥してゐた朝鮮人たちも立ち騒ぐこの物音に夢を破られ、眼を睜りて訝りながめてゐるも道理こそ、濡れた衣服は温突の熱氣に蒸されてかくの始末となつたのであつた。今年の春の旅行にも、會寧より圖們江を渡り

龍井村附近



兀良哈

明初の頃遼東に侵入して来た部族の名、こゝでは古その部族のゐた土地のこと。

文法

凍える
襲ねる
得る
徒涉する
破る
漏れる

て龍井村を訪れた時、春とはいへど胡沙吹く風のまだ寒い古兀良哈、旅館の主人の親切から温突の室に幾夜を過したが、厚衾襲ねての夜半の夢は、吾が家に居る時のやうに圓かならず襲ねた衾をはねのけて、僅に一枚の小夜具を被つてからうじて眠ることを得たこともある。しかも夜明けて後の心地は、何となく濛朧として、頭の岑々と痛むを覺えたのを見れば、温突はたしかに邦人の習性には適したものはあるまいと思ふ。さりながら、私は朝鮮の春と夏と秋とを知つて、未だ冬を知らない。寒威の酷しい朝鮮の、しかも彼の土壁草屋、隙もる風の刀のごとき民家にあつては、この温突あつて始めて寒き夜を凍えずに過され得ることであらう。

(滿洲趣味の旅)

薄田泣菫
名は淳介、岡山縣の
人、明治十年生、小
説家・詩人。

木犀

二四 木犀の香

薄田泣菫

「いゝ匂だ。木犀だな。」

私は縁端にちよつと爪立をして、地境の板塀越しに、一わたり見えるかぎりの近處の植込を覗いてみた。だが、木犀らしい硬い常緑の葉の繁みは、どこにも見られなかつた。この木の花が白く黄いろく咲き盛つた頃には、一二丁離れたところからでもよくその匂が嗅ぎつけられるのを知つてゐる私は、それを別にいぶかしくも、また物足りなくも思はなかつた。

名高い江西詩社の盟主黄山谷が、初秋の或日、晦堂老師を山寺に訪ねたことがあつた。久闊を叙しをはると、山谷は待ちかねたもののやうに、
「時につかぬことをお尋ね申すやうですが……」

黄山谷

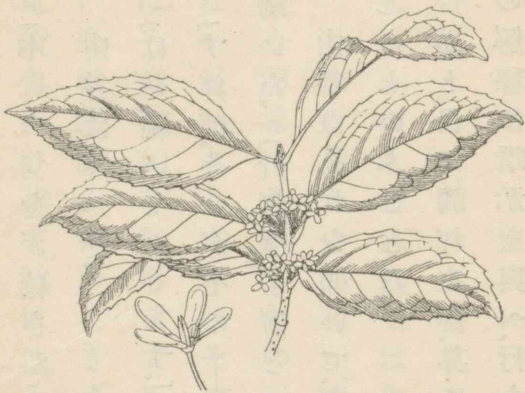
黄庭堅、字は魯直、山谷はその號、支那宋の人、詩人、江西詩派の祖。

晦堂老師

黄堂寺住職晦堂老師

といつて、

「吾無隱乎爾。」



犀

木

といふ語句の解釋について、老師の意見を叩いたものだ。この語こそは、山谷がその眞義に徹しようとして、工夫に工夫を重ねたが、どこかにまだはつきりしないところがあるのも、扱つてゐたものだつた。晦堂は客の言が耳に入らなかつたもののやうに、何とも答へなかつた。寺の境内はひつそりとしてゐた。あたりの木立を透して、そよ／＼と吹き入る秋風の動きにつれて、冷々とした物の匂が、開け放つた室々を、腹這ふやうに流

れて往つた。

晦堂は静かに口を開いた。

「木犀の匂をお聴きかの。」

山谷は答へた。

「はい聴いてをります。」

「すれば、それがその——」
「晦堂の口もとに微笑の影がちよつと動いた。『吾無^キ隠^ル乎爾』といふものぢやて。」

山谷はそれを聞いて、老師が即答のあざやかさに心から感歎したといふことだ。

ふと目に觸れるか、鼻に感じるかした當座の事を捉へて、難句の解釋に暗示を與へ、行き詰つてゐる詩人の心境を打開して見せた老師の搏力^{ツツキ}には、さすがに感心させられるが、しかしこの場合、一層つよく私の心を牽くのは、寺院の奥まつた一室に對座し

高逸閑寂

心像

てゐる老僧と詩人との間を、煙のやうに脈々と流れて往つた木犀のかぐはしい呼吸で、その呼吸こそは、單に花樹の匂といふばかりでなく、また實に秋の高逸閑寂な心そのものより發散する香氣として、この主客二人の思ひを淨め、興を深めたに相違ないといふことを忘れてはならぬ。

草木の花といふ花が、時にふれ、折につけ、私達の心像に残してゆく印象は、それ／＼の形と色と光との交錯^{カクゴウ}したもの以外ならぬが、ひとり木犀はその高い苦味のある匂によつてのみ、私達にその存在を黙語してゐる。木犀の花はぢ／＼むさく、古めかしい、金紙、銀紙の細かくきざんだのを枝に塗りつけたやうな、何の見所もない花で、言はばその高い香氣をくゆらせるための、質素な香爐に過ぎないのだ。

秋がだん／＼^ク闌^クけゆくにつれて、紺碧の空は日ましにその深

漂渺

さを増し、大氣はいよ／＼その明澄さを加へてくる。月の光は宵々ごとにその憂愁と冷徹を深め、蟲の音もだん／＼とその音律が磨かれてくる。かうした風物の動きを強く深く樹心に感じた木犀が、その老いて若い生命と漂渺たる想とをみづからの高い匂にこめて、十月末の静かな日の午過ぎ、そのしるがね色のまたこがね色の小さな数々の香爐によつて燃焼し、薫蒸しようとするのだ。匂は木犀の枝葉にたゆたひ、匂は木犀の東にたゆたひ、匂は木犀の西にたゆたひ、匂は木犀の南にたゆたひ、匂はまた木犀の北にたゆたひ、はては靡き流れて、そこしもなく漂ふうちに、あたりの大氣は薫化せられようといふものだ。

そして草の片葉も。土にまみれた石ころも。やがてまた私の心も……。

(獨樂園)

和辻哲郎

兵庫縣の人、明治二十三年生、哲學者、文學博士、東京帝國大學教授。

二五 心と言葉

和辻 哲郎

葛藤 我執 觸れ合はう

葛藤

心と心とを觸れあはせるには、言葉だけに頼ることは出来ぬ。言葉は不完全なものである。二つの心の緊張が高まつて、その間にそこばくの隔たりが感ぜられるやうな場合には、特にこの不完全が目立つて来る。思ふことを單純に現したつもりでも、相手がまるで異なつた方向に刺戟を受ける事は珍らしくない。觸れ合はうとする心は、いつまでも言葉の奥にちこまつてゐて、中心を離れた問題の上に、いらだたしい神経と我執とを衝突させるのである。興奮の度が強まれば強まるほど、言葉の不完全が産み出すこの葛藤は烈しくなるやうに思はれる。

しかし、この不完全な言葉を使つても、心が何のこたはりもなくすなほに向うへ通ずることもある。時には、その言葉の必要

心の論理
頭の論理

さへもない。それが言葉の上の詳しい説明や了解を必要とするはずの場合においてもさうなのである。

だから言葉によつて心を通ずることは出来ぬといひきるわけにはゆかない。しかしまた、言葉で説明しさえすれば、心は通ずるものだといひきること出来ぬ。

心を通ずるのは、心の論理がとほつてゐるからである。頭の論理がいかに正確に言葉の内に現れてゐても、心の論理がとほつてゐなければ、人の心を承服心得させるわけにはゆかない。

例へば、或人の行爲に對して、非難の心持を経験するとする。その行爲の正しくないことを指摘して、それを改めさせるのは、確にいふことである。しかし、その行爲の正しくない所以をいかに明白に説明して聞かせても、それが頭の論理で押詰められていく間は、相手は決して承服するものでない。こちらの立場

反撥

性格
氣質

から相手の行爲を不正と判断しても、相手は相手の立場で何かしら辯解をもつてゐる。その辯解を悉く説き破つたところで、相手の心は反撥の力を強めるばかりである。純粹に理論の問題を討議するやうなぐあひには決してゆくものではない。

それは人間の行爲が、その人の性格や氣質に根ざしてゐるか、根ざしてゐるからである。當人にも、頭の論理だけで、自分の行爲を支配することとは出来ない。彼が道徳的反省によつて、自分の行爲を制御しようとする場合には、著しく自分の心の論理にたよつてゐる。それゆゑに、他から頭の論理で押詰められても、それによつて行爲を改める情熱が湧いて来るはずはないのである。むしろ、彼の性格や氣質に對して十分同感してくれない相手の心情や、論理的に自分の立場を覆さうとする相手の征服欲などが、問題の焦點たる不正の指摘よりも、遙かに強い刺戟を彼に與へるので

燃え。
(燃ゆ)

ある。

たとひ、忠告者の心に正義に對する情熱が燃えてゐるとしても、またその忠告が非常に正しいことであるとしても、相手がその忠告のうちに同情を感じずして、たゞ征服欲を感じるのみであるならば、忠告者の心は、終に相手の心に觸れることが出来な

いであらう。忠告者が相手をよくしようとしてゐる親切な心も、かういふ場合には現れる場所がない。いかに言葉でそれを説明しても、相手の心には響かない。言葉は畢竟空である。

或心の状態を現す言葉は、複雑な組織を土臺として現れて來る。だから同一の言葉もそれを使ふ人の人格の異なるに隨つて、それ／＼に異なつた色調や倍音（オクターブ）を伴ふ。言葉を通して、その背後にある人格がにじみ出し、ひゞき出すのである。

心を現す言葉の妙味はこゝにある。それは、單なる知識の集

倍音

假託

キリスト
ユダヤの人、キリス
ト教の祖、西曆三〇
年歿、年三十四。

積によつては、些かも深められるものでない。たゞ正直に、その人の築き上げた生活を暴露する。何の假託も、虚飾をも許さない。同じ言葉を使つて、同じやうな心生活を表現しようとするのは、各人の自由であるが、それによつて眞實に表現せられる心生活は、言葉が同一であるやうに輒（たやす）くは同一であることが出来ない。その人が獲得した生活の高さは、いかなる場合にも、その人の言葉の内容に、或限界を與へる。キリストと同じ眞理を語ることも、もしくはそれ以上に深い眞理を語ることは、二十世紀の今日では極めて容易であると考へてゐる人が、我々の眼前にいかにか多いことであらう。しかしまだ何人も、キリストの如き力と愛とをその言葉からひゞき出させたものはない。貴いのは言葉でなくて、言葉の奥にひそむ心である。

(偶像再興)

姉崎嘲風

名は正治、京都市の人、明治六年生、文學博士、東京帝國大學名譽教授、宗教哲學者。

友

高山樗牛を指す。

翻

姿一婆

見分かぬ。までに消え失せぬ。

清見瀉

靜岡縣庵原郡興津町の海岸。



函

二六 忘れ難き日

姉崎 嘲風

嗚呼、忘れ難きこの日よ。憶へば早五年の昔春光うらゝかに南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは恰も今日この日なりき。帽を振れる客、巾を翻せる友、船上艇中相隔たりては、面も定かならず、姿も終には見分かぬまでに消え失せぬ。「健在なれ」「再び早く相見ん」との別離の言葉はなほ耳に響きつゝ、最後の握手なほ掌に感ぜられつゝも、見渡せば白鷗飛びかふ海の面は渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りぬ。嗚呼、かくて相別れたる友、今何處ぞ。「君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を越えて駿州に入り、清見瀉の海樓に宿りて別離の悶えを遣りたりき。その夜、月明らかに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。

中宵欄に凭りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。」

これ我が友の寄せたる書信の一節なり。

月は去り日は逝きて、今日この日、我は彼の嘗て宿りし海樓に在れど、彼は已に世を謝して、我獨り孤影蕭然として欄に凭る。微雨蕭々、一灣の風光濛として夢に似たり。人生遭逢のはかなきを歎じたる彼、今や我をこの世に残し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。

心を痛ましむるこの夕、有渡の山影かすかに、袖師の松原雨に朧なり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹のうらに包まれて、海面亦死せるが如く、欄下渚邊に寄する浪の音かすかにおとづる。この海、この地、これ彼が久戀懷慕のところなりき。この夜、この風光、これ彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊

今日のこの日

明治三十八年三月三十一日。

泡沫

有渡の山

清水市の西方に在り、久能山の背後の峰續きの山で、富岳を眺望する景勝地。

袖師の松原

興津町の西方海濱に在る。

埋骨の地

清水市不二見に在る龍華寺。

暗澹

種たりしこと

銷魂

落 寞

の如く、風光昔のまゝにして、その月その日は茲に還り來り、彼が友は已に歸り來つれども、その人とその姿とは今や尋ねるに由なし。昨は、彼が墓邊に、櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫て、今夜五年前の今日のこの日の別離を偲びて、彼が遺文に對す。嗚呼、我この流轉の世に處し、この友なくして如何にしてか憂懷を遣らん。この夜、この風光、ひたすら思慕の深く、恨みの長きを加ふるを如何せん。「人生何ぞ舊に依りて落寞たるの甚しきや。」別離の悲しみ何ぞ獨り悵として盡き難きや。

されど徒に憂ふるを已めよ。人に千歳の齡なく、世に別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却つて懷慕の樂しみを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。友こゝにあり、悠久の夜亦こゝにあり。彼が遺文餘薰新に、我が思慕、日ごとに彼に通ず。清見灣頭、今宵、雨しめやかにして、夜靜

濤

款 暗

平生云々
「姉崎嘲風に與ふる書」といふ樗牛の文の中に見える句である。
同じうす

かなり。形は見えねど、彼は我と語り、我は彼に接し、松風濤聲また時に款暗に入り來る。嗚呼、平生憂ひを同じうするもの、君と予と先世何の契縁かある。身世匆忙として相移り、際遇すでに相異なり、生死幽明を隔つといへども、彼と我と百世億劫常に相伴はむ。

歲月流れ去つて五年の昔を今に返さん由なきも、神相接しては生死路相隔てず、三世一心の中に融け來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。

人里には燈火已に影を收め、清見瀉の山海また眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ。有渡の山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して、我は我が友と相語りつゝ、今宵一夜の睡に入らん。

(停 雲 集)

高山樗牛
 名は林次郎、山形縣の人、文學博士、文藝評論家、明治三十五年歿、年三十二。

日蓮上人
 安房國(千葉縣)の人、俗姓貫名氏、法華宗の祖、弘安五年(一九三)歿、年六十一。

二七 日蓮の温情

高山 樗牛

日蓮上人は、獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上の各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は、宇宙間第一の眞理なりと確信せる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害をも甘受すべしと覺悟し、法華經の爲に此の臭き頭を刎ねられむは砂に黄金を換へ、糞に米を代ふるなり。」と、喝破し、眼中權勢もなく、威武もなく、眞に高天濶地、獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとして又豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しかりしにはあらず。日蓮上人が、人情に篤く恩誼に深く、その情、時としては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に堪へざらしむるものあり。今、左に一二の例を擧ぐべし。

刎ねられむは
 喝破

堪へざらしむるもの

歸依
 不惜身命
 龍の口

神奈川縣川口村龍口寺の地、鎌倉幕府の刑場。

慟哭

藹然

たとい……とも



日蓮上人

上人の信者に、四條金吾とて、江馬遠江守の老臣ありき。この人武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜身命の覺悟をもつて、上人と共に諸の迫害を被れり。上人龍の口にて斬られんとせし時は、路上に馬の轡をとりて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深くこの人の節義に感じ、後年幾多の消息文は常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中、殿にして若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとひ釋尊及び十方の諸佛手を引き袂をとらへて淨土に迎ふとも、振切つて必ず殿とともに地獄に墮すべし。」との意を述べられたり。その恩愛の濃やかなる事、喩ふべし。

涕淚

べきものなし。天下の威武を敵として一步も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕淚ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明らかに現れ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年日本六十箇國、島二つの内に五尺に足らざる身一つを置く處なくして、身延山の深谷に隠るるや、九箇年が間、五十餘町の險山を日ごとに一度は必ず攀ち登りて、遙かに上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳中にも、これと比較し得べき者あらざるべし。

上人病篤くして甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より、乘馬一匹に舍人一人を添へて遣されけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に著きて波木井殿に

夙 本化門下

身延山

山梨縣南巨摩郡、南麓に日蓮宗の總本山久遠寺がある。

上人の故郷 安房國(千葉縣)小湊浦。

檀越

波木井氏

南部實長、日蓮信者、入道して日圓といひ、永仁五年(一九五)歿、年七十六。

舍人

罷

たとしへなく

こそ……あるなれ

送れる書中にも、この馬を色々いたはしく思ふ旨を書かれたる終に、「知らぬ舍人を附けて候はむは、覺束なく覺え候。罷り歸り候はむまで、この舍人附けおき候はむと存じ候。」とあるなど、自分の病苦を厭はず、ひとへに一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く恩愛に濃やかなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。此の「備愛」なくば彼の「豪邁」もあらじ、彼の豪邁あればこそ此の情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を造るなり。かのうるはしき薔薇の織物を見ずや、表に花と刺と別別に織り成さるれども、その裏面を見れば、花を織る絲、即ち刺を織る絲にあらずや。

(釋牛全集)

澁澤榮一
號は青洲、埼玉縣の
人、實業家、子爵
昭和六年歿、年九十
二。

澁澤

二六 現代青年に望む

澁澤 榮一

時勢が推移すると共に、社會狀態が變つて行く。そして社會狀態が變つて行くと共に、それを反映する時代思想も變つて行くのであるが、現代の青年について此の三者の移り變りを見ると、彼等は私共の青年時代とは違つて、一般に利巧になつて居る。目先が利く様になつて居る。しかしながら、其の反面には通弊ともいふべき幾多の短所があるやうに思ふ。

其の短所の一つは、彼等が餘りに功を急ぐことである。どうかして早く世に出よう知られようとあせり過ぎることである。彼等はこれが爲に自己を廣告し、宣傳して、機會のあるごとに自分を偉く見せようとする。そして其の一方に於て、大切な自己の修養を閑却する傾向がある。これは無論現代人一般の通弊

出よう、
知られよう、
見せよう、

粧



澁澤 榮一

ではあるが、特に之を前途のある青年に見るのは惜しむべきことである。修養を怠りながら徒に功を急ぐのは、たとへば商品の質を改善しようとはせずして、粗製濫造の品をイルミネーションで廣告して、其の存在を認められようとするやうなものである。

現代は總べてが廣告の世の中である。廣告が上手であれば商品が賣れる。殊に化粧品や賣藥などは實質よりも寧ろ廣告で賣れるといふことであるが、人間が世に立つのは、化粧品や賣藥を賣るのは全然譯が違ふ筈である。吾々は何よりも先づ實質を重んじ、修養を怠らぬや

狼狽

囊中の錐
夫レ賢士ノ世ニ處ル、
譬ヘバ錐ノ囊中ニ處
ルガゴトシ、其ノ末
立チドコロニ見ハル
(史記、平原君傳)

うにせねばならぬ。若し常に修養を心に掛けて、内容の充實、實質の完成に努力するならば、何時かは必ず之を有効に役立てる時が来るであらう。出しゃばつて知つた振りをし、自分を偉く見せようとするのは、當人自身には榮達の近道と思はれるであらうが、第三者の公平な眼からは、輕薄な、輿行のない人間、信賴して仕事を任せる事の出来ない人物と見られる結果になるのである。之に反して平素修養を心掛けて居る人物は、何時、如何なる場合に於ても狼狽することがなく、而して事ある毎に、價値のある人間と云ふ事が證據立てられるであらう。

支那の古言に、有爲の才人を譬へて囊中の錐の如しと云つて居るが、これは囊の中の錐が上から押されると其の尖端を現すと同じやうに、實力を備へた人は平時は人に知られずとも、事があれば必ずその才能を顯すといふ意味である。青年諸君は深

蹉跌

く此の點を反省しなければならぬ。而して自分の力量不相應に功を急ぐのは、却つて將來の榮達を阻害し、蹉跌を來す基である事を深く思ふべきである。

次に私は、今の青年が仕事に對して不平を抱く事を、甚だ遺憾に思つて居る。例へば「自分は實力があるのに、世間では認められない。」とか、「良い地位を與へてくれない。」とか、或は「自分は此の方面の知識を持つて居るのに、更にそれを應用させてくれない。」とかいふ不平は、屢、聞くところである。否、僅少の例外を除けば、今の青年の悉くが、殆ど共通的に、この種類の不平を抱いて居ると言つてもよいであらう。併しながら、これは間違つた考へと言はねばならぬ。なぜかといふに、良い磁石が自然に澤山の鐵を吸ひつけるやうに、人間にも、力があれば自然に力相應の仕事が與へられる筈だからである。

世の中に仕事は澤山ある。けれども一つの仕事に對して不平を言ふ人からは、すべての仕事は逃げて行くものである。これが我儘者に失業者の多い所以で、それならどうすればよいかといふと、與へられた仕事を、完全に而して迅速になし遂げる事がまづ最も肝要であらう。與へられた仕事を、迅速に完全になし遂げる時は、求めずして信賴される様になり、而して自然に第二第三の仕事が與へられるやうになる。それは丁度、良い磁石が澤山の鐵を吸ひつけるのと同じ理窟で、かくしてこそ、やがて價値ある人物として重用され、從つて將來の榮達を期することが出来るであらう。

要するに、與へられた仕事は、どんな詰らぬ事でも、自分の天職と心得て、不平を言はずに立派に仕遂げるやうにしなければならぬ。若し一つの仕事に對して、不平を抱いて怠けるやうな青年ならば、その人は明らかに他の仕事を爲すにも適して居ないので、さういふ青年は到底將來の發達を望むことが出来ぬであらう。

謙讓

吾々の青年時代には漢學が盛んで、その中に説かれてゐる謙讓の美德といふのを大分重んじたものであつた。此の謙讓の心掛は一般に此の徳を重んじないで、寧ろ之に反對の傾向を持つ自己満足 of 思想に捉はれて居るやうである。此の流行からすれば、謙讓などいふ事は時代遅れの思想と考へられるであらうが、しかしながら、謙讓は決して時代おくれでもなければ、間違つた道徳でもない。活社會に立ち、融和協調して他人の信用を得るには、どうしても此の徳が必要である。但し謙讓と卑屈とは紛はしいものであるから、取りちがへぬやうによく注意しなくてはならぬ。謙讓とは解り易く言へば出しやばらぬ事であ

融和協調

れ
て
行
く

あ
か
し

け
ん

倫理道德

孔子

孔子 字は仲尼、魯
の人、儒教の祖、西
暦前四七九年七十三

遵奉

る。早く世に知られようとして、みだりに自己宣傳をせぬ事である。それは勿論、必要な場合にも知つて居る事を押隠して、知らぬ風を装ふがよいといふのではない。たゞ平生つゞまやかに身を持つて、専ら修養を積みといふのである。
また現代の青年には、概して老人の言ふ事をば「古臭い」「時代遅れだ」と云つて排斥する傾向があるが、これも大きな間違である。時勢の推移するにつれて、思想も亦遷り變るのは當然であるが、倫理道德は水の流の様に、さう造作もなく移動するものではない。私は多年孔子の教を處世の教訓として遵奉して來て居る。無論二千四百年前に説かれた孔子の一言一句が、悉く現代に當て嵌るといふわけではないが、しかしその根本精神は、人間生活の活教訓とするに足るべき立派な道德だと思つて居る。大小の違ひこそあれ、老人の言ふことなども、やはり同様の取りどころ

墨守

咀嚼

趨

ろがあるであらう。無論、舊習を墨守し、時代に遅れるやうな事は、御互に大いに排斥しなければならぬが、さればと言つて、何でも新しくさへあれば良いといふ様な考へで、能く吟味も咀嚼もせず、新規の事物を取入れるのは、最も慎まなければならぬことである。
それから現代の青年には、動もすれば空想に趨り過ぎる傾がある。理想を高く立てるのはよいが、空想に趨ることは慎まねばならぬ。人間に理想がなかつたら、その人は單に生きんが爲に働いてゐるに過ぎなくなる。それでは人間としての價値がないので、殊に青年に理想がなかつたら、青年としての存在の意義を有せぬことになるであらう。それ故、青年が高遠の理想を抱くのは大いに結構のことであるが、過つて空想の域に踏み込まぬやう、返すくも注意せねばならぬ。

總じて、青年に取つて第一の肝要は、元氣の横溢してゐる點に在るが、現代の青年は利巧になり過ぎた結果、一面に於て空想に趨る傾向があると共に、他の一面に於て活氣に乏しい嫌ひがあるやうである。これは恐らく、餘りに目先の事ばかり考へる結果であらう。明治維新の大勢を馴致したのは青年の力であつたではないか。尤も幕末時代と今日とでは時勢が異なつて居るから、同一に論ずる事は出来ぬが、青年の意氣はあのやうにありたいものである。この意氣が無ければ、到底大いに伸びることは出来ぬ。唯くれぐれも注意すべきは、理想と實際とは必ずしも一致するものではないから、たとひ理想幻滅の場合に遭遇しても、決して失望落膽することなく、一層勇氣を奮ひ起して事に當る覺悟をすべき事である。青年時代は思想の動搖し易い最も危険な時代である。此の時代にもし自暴自棄に陥るやう

な事があつては、一生を誤る事になるであらう。それにつけても大切なのは修養で、平素修養を積んでさへおけば、如何なる場合にも其の方針を誤るやうな事がない筈である。

私は人間一生の中、活力の最も旺盛な青年期及び壯年期の人達に最も多く望を囑する。凡べての仕事は是等の元氣潑刺たる人達が中心となつて行ふべきであるが、さればと言つて先輩を無視することは宜しくない。青年及び壯年者は未來に生きるもので、洋々たる前途を持つてゐる。之に對して、老年者は未來には貧しいが、その代り豊富なる過去を持つて居り、幾多の實際経験を積んでゐる。此の實際の経験といふものは、成功失敗いづれの経験たるに拘らず、後進者に對する生きた教訓で、机上の空論に勝ること萬々であり、且金錢で購ふことの出来ぬ尊いものである。それ故青年諸君は勉めて先輩に接してその意見

參考資料

を敲き、之を參考資料として、着々と仕事をやるやうに、而して先人の失敗を繰返さずして、立派に成功するやうに心掛くべきである。

青年の未來は國家の未來である。私は青年を愛し、國家を憂ふるが故に、此の老婆心的の苦言を呈する。決して言を好むのではない。此の老人の苦衷を諒として貰ひたいと思ふ。

〔青淵訓話集に據る〕

苦衷

訂五新日本讀本卷五 (終)

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正) (千八百五十八字)

【一】一丁七丈三上下不
世丙並【一】中【一】丸主
【一】之久乏乘【一】乙九
乞也乳亂【一】了事【一】
二五五井【一】亡交京亭
亦【一】人仁仇今介仕他
付代令以仰仲伴任伊伏
伐休伯伴伺似位低住佐
何余佛作伸使來佳例侍
供依侮候便係促俱俊
俗保俠信修俳俵倅併倉
個倍倒候借倫假偉偏倅
健側偶傍傑備催働傳債
傷傾僅像僚僞僧價儀億

儉價優【一】元兄充兆兎
先光克免免兒【一】入内
全兩【一】八公六共兵具
其典兼【一】冊再【一】元
【一】冬冷涼准凌凍【一】
凡【一】凶出【一】刀刃分
切刊刑列初判別利到制
刷祭刺刻則削前剛副剩
割創劇劍劑【一】力功加
劣助努効勅勇勉勳勸務
勝勞募勢勳勳勸【一】
包【一】化北【一】區【一】
十千升午半卑卒卓協南
博【一】占【一】印危却卵

卷卽【一】厄厘厚原厥
【一】去參【一】及友反叔
取受【一】口古句叫召可
史右司各合吉同名后吏
吐向君吟否含呈吸吹告
咸周味呼命和咽哀品員
哲唐唯唱商問啓善喉喜
喪喫單嗣嘉器噴嚴囁
【一】囚四回因困固國圍
園圓圖團【一】土在地坂
均坊坑坪垂型埋城域執
培基堀堂堅堤堪報場塔
塗塵境墓塀增墨墮壁壇
壓壤【一】士壯登壽【一】

夏【一】夕外多夜夢【一】大
大天太夫央失奇奉奏契
奔奢輿奪獎奮【一】女奴
好如妃妊妥妙妨妹妻姉
始姑姓委姦姪姪姻姿威
娘娛娠娼婦婦媒嫁嫡
嫌孃【一】子字存孝季孤
孫學【一】宅守安宏完宗
官定宜客宣室宮害宴家
容宿寄密富寒察寢寢實審
寫寬寶【一】寸寺封射將
專尉尊尋對導【一】小少
尙【一】尤就【一】尺尼尾尿
局居屆屈屋展層履屬

【山】山岡岩岳岸峙峯島
峽崇崎崩【川】州巡巢
【工】工左巧巨差【己】己
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣【干】干
平年幸幹【幻】幼幾【床】
床序底店府度座庫庭庶
康廉廓廢廣廳【延】延廷
建廻【弄】弄弊【弋】式
【弓】弓弔引弟弱張強彈
【形】形彩彫影彰【役】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復徵徵德微【心】心
必忌忍志忘忙忠快念怒
思念急性怨怪性恐恥恨
恩恭息悔悟悖患悲惟悼

情感惜惠惡情惱想愁偷
意愚愛感慈慈慕憐悽憤
憤慨慮慰慶慾憂憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戈】成戎戒戰戲戴【戶】
戶戾房所扇【手】手才打
扱扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓拔拘
拙招拜括拳拾持指振捕
捧描捨掃授掌排掛探探
控推揚接提換握揮搨揮
援損搖搜摘摩撫揮擊
操擔據擬擴攝【支】支
【支】收改放政故敝教
敏救敗敢散敬敵敷數整
【文】文【斗】斗料斜【斤】

斤斤斬新斷斯【方】方施
旋族族旗【无】既【日】日
且旨早旬旭昇昌明易昔
星春昭昨是映時晚晝普
景晴晶智暇暖暗暑暮暴
曆臺曜【目】曲更書曹會
替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木未末本
札朱机朽杉材村束柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染柔查柅柱柳栗校
株根格栽桃案桐桑梅條
梨棧棗棋棒棟森栢植楠
業極榮構概樂樓標樞模
樣樹橋機橫檝檢櫻欄權
【欠】次欲款欺歌歡歐歡

【止】止正此步武歲歷歸
【歹】死殊殉殖殘【段】段
殺殿毀【母】母每毒【比】
比【毛】毛【氏】氏民【氣】
氣【水】水冰永汙求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河
沸油治沿沿沿況泉泊法波
泣泥注泰泳洋洗津洪活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑淚淡淨淫深混清淺
添減淵渡溫測港渴湖湧
湯源準溢溶溺減滋滑滯
滴滿漁漂漆漏演漕濃濕
漫漸潔潛湖澤激濁濃濕
濟濟瀧灣【火】火灰災炊
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營爆爐【爪】
爪爭爲爵【父】父【爻】爾
【片】片版牌【牙】牙【牛】
牛牧物牲特犧【犬】犬犯
狀狂狩狹猛猫猶獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴環
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
烟畜畝略番畫異雷當疊
【疋】疋疎疑【疋】疫疲疾
病症痘痛痢療癖【六】登
發【白】白百的皆皇【皮】
皮【皿】皿盆益盛盜盟盡
監盤【目】目盲直相省眉

看真眠眼着睡督【矢】矢
知短【石】石砂砲破研硬
硯碁碎碑確磁磨礪【示】
示社祈祕祖祝神票祭禁
禍福禦禮【禾】秀私秋科
秒租秩移稅程稚種稱稻
稿穀積穗穩【穴】穴究空
突竊窺窗窳【立】立章童
端競【竹】竹竿笑笛符第
筆等筋筒答策算管箱節
範築篤簡簿籍【米】米粉
粒粘粗粹精糖糞【糸】系
紀約紅紋納純紙級紛素
紡索紫累細紳紹紺終組
結絕絡給統絲絹綉綠維
綱網綴綻綿緊緒線締綠

編綰緯練縛縣縫縮縱總
績繁織繕繪繭線繼續
【缶】缺【罽】罪置署罰罵
罷羅【羊】羊美羣義【羽】
羽翁翌習翼【老】老考者
【而】耐【耒】耕【耳】耳聖
聞聯聲職聽【聿】肅聲
【肉】肉肖肝股肥肩育肺
胃背胎胞胸能脅脈脊
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜
膝臆臆膺臆【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【目】與興舉舊【舌】舌舍
【舟】舞【舟】舟航般舵舶
船艦【良】良【色】色【艸】
芝花芽芳苑苗若苦英茂

茶草荒荷莊莊菊菓菜華
萬落葉著蕤蒙蒸蓄蔓薄
藏藝藤藥【虺】虺虐處虛
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲
蠶蠶【血】血衆【行】行術
街衝衝衛【衣】衣表袞袞
袖被裁裂裏裕補裝裸製
複褒襲【西】西要覆【見】
見規視親覺覽觀【角】角
解觸【言】言訂計討訓託
記訟訪設許訴診詐詔託
詞詠試詩詰話詳誇誌認
誓誕誘語誠誤說課調談
請論論諸諸謀諷諷諷謝
諛謹謬證識譜警譯議護
譽讀變讓【谷】谷【豆】豆

豐【豕】豚象豪豫【貝】貝
貞負財貧貨販貫責貯貳
貴買貸費賀賀賄賄賄賄
賓賜賞賢賈賤賦質賴購
贈贊【赤】赤【走】走赴起
超越趣【足】足距跡路踊
躍【身】身【車】車軌軍軒
軟軸較載輕輦輪輯輸輿
轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰
農【毛】込迎近返迫迭述
迷追退送逃逆透逐途通

速造連週進逸遇遊運
過道達達遙遙遠遠遭遭
遲遲選選避避還邊邊【邑】
邦邪邱郊郎郡部郵都鄉
【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
醜醫【采】釋【里】里重野
量【金】金釜針鈞鈍鈴鉛
鉢銀鉢銅銘銳鋒鋼錯錄
錢鍋鎖鎮鏡鑄鐘鐵鑑鏝
【長】長【門】門閉開閉
開開闕【鼻】防附降限陞

院陣除陪陳陰陵陶陷陸
陽隆隊階隔隙際障隣隨
險隱【隹】隹雀雄雅集屨
雌雙雜離離【雨】雨雪雲
零雷電雷震霜霧露靈
【青】青靜【非】非【西】面
【革】革靴【音】音響【頁】
頂項順頤預頤領頭頻題
額額顛顛類顛顛【風】風
【飛】飛翻【食】食飢飲飯
飾養餓餘餅館餐【首】首

【香】香【馬】馬馳駁馱駐
騎騰騷驅驗驚驛【骨】骨
髓體【高】高【髟】髮【門】
闕【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮
鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
【鹵】鹵【鹿】鹿麗【麥】麥
【麻】麻【黃】黃【黑】黑獸
點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】
齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】
龜

注意

(一) 本表にない漢字は假名で書くこと (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、た
だし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三) 代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞
および助詞はなるべく假名で書くこと (四) 外來語は假名で書くこと。

略字表

(臨時國語調査會發表)

左の字體を本位として用ひること。
(括弧内の小字は字典體)

勸(勸) 權(權) 灌(灌) 歡(歡) 觀(觀)
沢(澤) 扱(擇) 訳(譯) 馱(驛) 积(釋)
变(變) 恋(戀) 蛮(蠻) 灣(灣)
莖(莖) 徑(徑) 經(經) 輕(輕)
併(併) 塤(塤) 瓶(瓶) 餅(餅) 研(研)
齊(齊) 齋(齋) 濟(濟) 劑(劑)
残(殘) 淺(淺) 賤(賤) 錢(錢)
勞(勞) 嘗(嘗) 榮(榮) 學(學) 覺(覺)

举(舉) 誉(譽)
齒(齒) 齡(齡)
窓(窗) 窓(總)
為(爲) 偽(僞)
參(參) 慘(慘)
兇(發) 廢(廢)
乱(亂) 辭(辭)
走(走) 徒(徒)
惱(惱) 腦(腦)
担(擔) 胆(膽)
寿(壽) 鑄(鑄)

断(斷) 繼(繼)
湿(濕) 頭(顯)
属(屬) 囑(囑)
帶(帶) 滯(滯)
兩(兩) 滿(滿)
兎(鼠) 獺(獺)
潜(潛) 贊(贊)
位(從) 縱(縱)
処(處) 扱(據)
耒(來) 麥(麥)
数(數) 樓(樓)

樂(樂)	葉(藥)	讀(讀)	繞(續)
竜(龍)	滝(瀧)	隨(隨)	髓(髓)
麻(鹿)	麋(麋)	聽(聽)	廳(廳)
虚(虚)	戲(戲)	遲(遲)	解(解)
独(獨)	觸(觸)	疊(疊)	撰(攝)
虫(蟲)	蚕(蠶)	仮(假)	兎(兎)
励(勵)	嘗(嘗)	国(國)	圉(圉)
凹(凹)	囟(囟)	壹(壹)	実(實)
写(寫)	宝(寶)	扣(控)	叙(敘)
条(條)	様(様)	帰(歸)	気(氣)
炉(爐)	犧(犧)	献(獻)	画(畫)

苗(苗)	尽(盡)	礼(禮)	称(稱)
糸(絲)	欠(欠)	声(聲)	台(臺)
旧(舊)	万(萬)	号(號)	証(證)
豊(豊)	弁(辯)	逦(遞)	辺(邊)
医(醫)	鉄(鐵)	関(關)	双(雙)
靈(靈)	余(餘)	館(館)	体(體)
塩(鹽)	点(點)	覚(覺)	
鬪(鬪)	刺(刺)	龟(龜)	

略字表 終

文語動詞活用表

活用種類	語根	活用形			
		未然	連用	終止	連體
四段	書	カ	キ	ク	ケ
上二段	起	キ	キ	ク	ケ
上一段	(著)	キ	キ	ク	ケ
下二段	兼	ネ	ネ	ケル	ケレ
下一段	(蹴)	ケ	ケ	ケル	ケレ
カ行變格	(來)	コ	ギ	ケル	ケレ
サ行變格	(爲)	セ	シ	ケル	ケレ
ナ行變格	死	ナ	ニ	スル	スレ
ラ行變格	有	ラ	リ	ヌル	ヌレ

口語動詞活用表

活用種類	語根	活用形			
		未然	連用	終止	連體
四段	書	カ	キ	ク	ケ
上二段	有	ラ	リ	ヌ	ケ
上一段	起	キ	キ	ク	ケ
下二段	兼	ネ	ネ	ケル	ケレ
下一段	(著)	キ	キ	ケル	ケレ
カ行變格	(來)	コ	ケ	ケル	ケレ
サ行變格	(爲)	セ	シ	ケル	ケレ

文語形容詞活用表

活用種類	語根	活用形	
		未然	連用
清	清	ク	ク
涼	涼	シ	シ

口語形容詞活用表

活用種類	語根	活用形	
		未然	連用
清	清	ク(ウ)	ク(ウ)
涼	涼	シ(ウ)	シ(ウ)

文語助動詞活用表

助動詞種類	語	活用形	
		未然	連用
受能敬	らる	れ	る
使役	さす	せ	す
時	つぬ	て	つ
指	たけ	た	た
否定	な	ら	ら
推量	べかり	ら	ら
比況	まじ	く	く
希望	たし	く	く
否定	ず	ず	ず
時	き	し	し

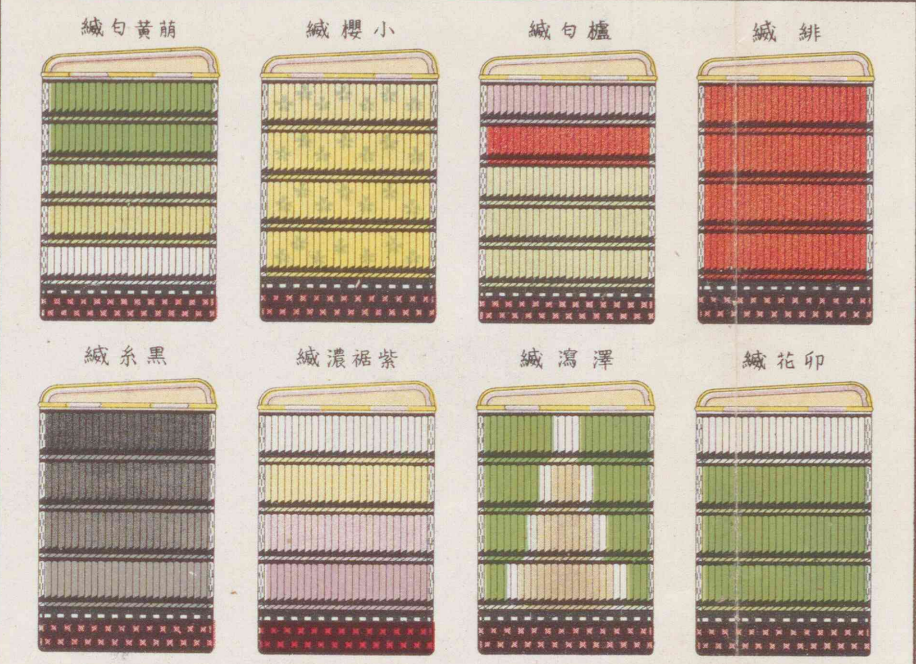
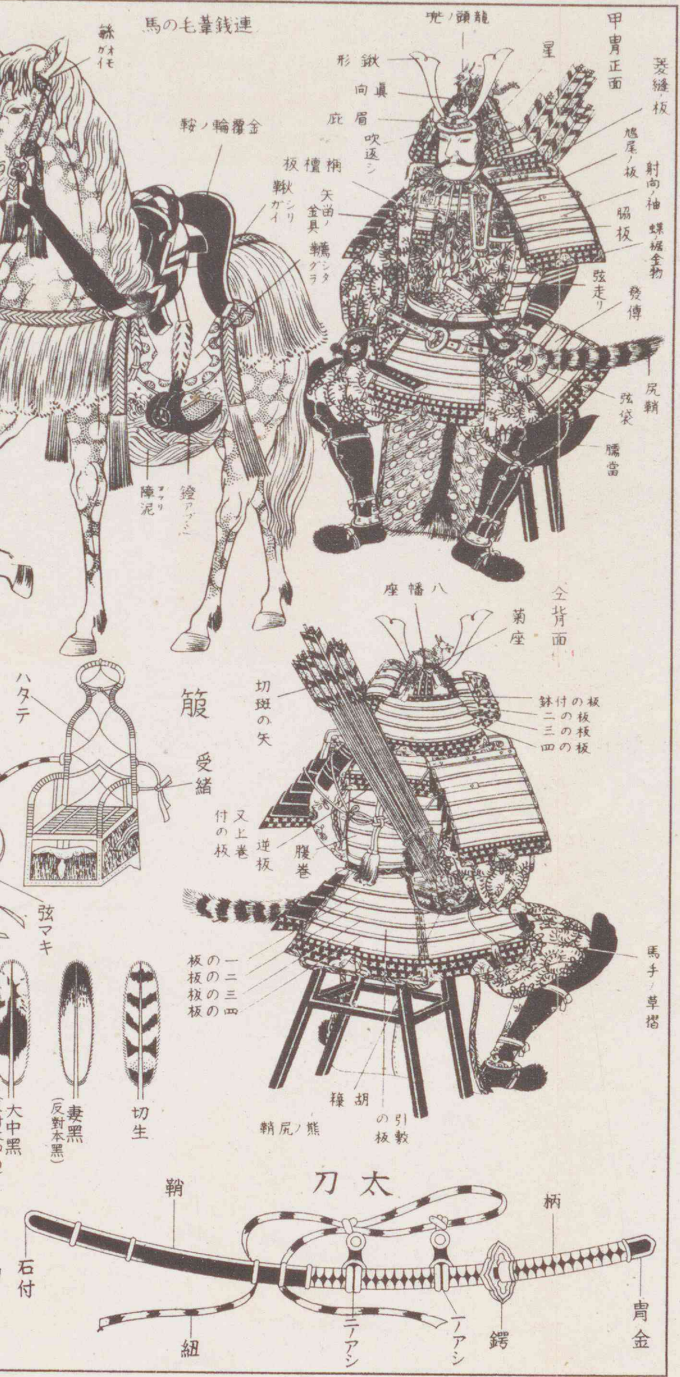
口語助動詞活用表

助動詞種類	語	活用形	
		未然	連用
受能敬	られる	れ	る
使役	させる	せ	す
時	た	た	た
指	た	た	た
否定	ない	く	く
推量	らしい	い	い
希望	たい	た	た
比況	う	う	う
否定	ない	ない	ない
推量	まい	まい	まい


動詞

形容詞

音便	一い音便	書き	一白き花
便	二う音便	防ぎ	二甘くなる
三撥音便	死に	て	三重くすん
積みて	飛び	て	



日六十二月一十年九和昭
濟定檢省部文
 用科語國校學業實・用科文漢語國校學中

發 兌	東京市神田區神保町一丁目二五ノ一	發行 者兼 者	新訂 本日 新本	 五訂 本日 新本	大正十四年十月十三日發行 昭和三年七月廿三日訂正三版發行 昭和六年七月卅一日訂正五版發行 昭和九年七月二十日訂正七版印刷 昭和九年十月廿八日訂正八版印刷	大正十五年一月五日訂正再版發行 昭和三年十一月五日訂正四版發行 昭和六年十一月二十日訂正六版發行 昭和九年七月廿八日訂正七版發行 昭和九年十一月三日訂正八版發行
	大阪府東區博勞町五丁目五十六番地					
修	振替口座東京二六四四番 文館					
	振替口座大阪四七一番					

卷一八	各金六拾錢
卷九一十	各金五拾五錢

Handwritten signatures and notes in cursive script (sōsho) on a grid background. The text includes names like '鈴木常松' and '吉澤義則'.

46
7

卷之二

崇德中集

西華夫

日本文學年表

(訂五新日本讀本附錄)

	古 (代時町室・倉鎌) <small>自一八五三 至二六二</small>	近 (代時朝安平) <small>自一四五五 至一八五二</small>	古中 (代時朝安平) <small>自一四五五 至一八五二</small>	古上 (代時和大)	
武道傳來記	假名草紙	宇治拾遺物語	今大榮今堤狹源落宇伊竹	宣風日古祝	文學の種類
世間胸算用	太閣紙	石清水物語	華昔物物物物物物	本 土 書	
日本永代藏	源平盛衰記	古今著聞抄	和紫蜻士	命記紀記詞	
浮世草紙	平家物語	東海十六夜日記	和泉式部日記		
七番日記	平家物語	新玉葉集	七千山詞家集	萬記 紀 葉 歌 (短長) 歌 集 諸	
花屋日記	源平盛衰記	菟玖波集	連		
奥の細道	源平盛衰記	新菟玖波集	歌		
賀茂真淵集	源平盛衰記	俳	梁新漢催神	民	
芭蕉七部集	源平盛衰記	小舞	塵朗朗馬樂	謠	
宗因千句	源平盛衰記	歌	抄詠詠集		
御傘	源平盛衰記	狂言			
流	源平盛衰記	言曲			
長	源平盛衰記				
歌	源平盛衰記				
淨瑠璃	源平盛衰記				
國性爺合戰	源平盛衰記				
曾我會稽山	源平盛衰記				
近衛門	源平盛衰記				
折焚く柴の記	源平盛衰記				
おら	源平盛衰記				
鶉	源平盛衰記				
風俗文選	源平盛衰記				
幻住庵記	源平盛衰記				
徒然草	源平盛衰記				
枕草紙	源平盛衰記				
袋草紙	源平盛衰記				
文鏡秘府論	源平盛衰記				
懷風藻	源平盛衰記				
本朝文粹	源平盛衰記				
經國文粹	源平盛衰記				
文華秀麗集	源平盛衰記				
凌雲集	源平盛衰記				
懷風藻	源平盛衰記				
室	源平盛衰記				作
新井	源平盛衰記				
森川	源平盛衰記				
近松	源平盛衰記				
貝原	源平盛衰記				
松屋	源平盛衰記				
井原	源平盛衰記				
藤原	源平盛衰記				
鴨	源平盛衰記				
西	源平盛衰記				
紫	源平盛衰記				
清	源平盛衰記				
紀	源平盛衰記				
在	源平盛衰記				
紀	源平盛衰記				
凡	源平盛衰記				
紀	源平盛衰記				
紀	源平盛衰記				
海	源平盛衰記				
大	源平盛衰記				
山	源平盛衰記				
山	源平盛衰記				
柿	源平盛衰記				
太	源平盛衰記				

古 (代時町室・倉) 自一八五三 至二六二

水鏡 吉野拾遺 增鏡 神皇正統記 保元物語 平家物語 平家盛衰記 源平盛衰記 太平記 義經記 曾我物語 小堀草紙

假名草紙 太閤記 浮世草紙 日本永代藏 世間胸算用 武道傳來記 草雙紙 黃表紙 酒落本 讀本

蜻蛉日記 花屋日記 七番日記 奥の細道 旅のなぐさ 菅笠日記 賀茂真淵集 桂園一枝 狂歌 古今夷曲集 萬歳狂歌集 良寛和尚歌集

御傘 (松永貞徳) 宗因千句 芭蕉七部集 蕪村七部集 一茶發句集

流歌 長吟 歌行 常盤津 清元 御落葉 松の詠歌

浄瑠璃 國性爺合戰 曾我會稽山 (近松門) 折焚く柴の記 折焚く柴の記 折焚く柴の記 折焚く柴の記 折焚く柴の記

幻庵記 風俗文選 鶉衣春 鶉衣春 鶉衣春 鶉衣春 鶉衣春 鶉衣春 鶉衣春 鶉衣春 鶉衣春

羅山文集 藤樹先生文集 白石詩草 鳩巢文集 栗山文集 山陽詩集 山陽詩集 山陽詩集 山陽詩集 山陽詩集

井原 松尾 貝原 近松 森川 新井 室 柳澤 竹田 賀茂 横井 谷口 本居 上田 加藤 村上 太田 良橋 松平 石原 小堀 瀧澤 清水 柴田 三浦 中島 頼

近世 (代時戸江) 自二二六三 至二五二七

浮世風呂 東海道中膝栗毛 滑稽本 合卷本 里見八犬傳 椿説弓張月 雨月物語 讀本

蓬生日記 亂れ髪 竹の里歌 萩の家歌集 アラ、ギ (雜誌) 啄木歌集 長塚節歌集 春泥集 空穂歌集 自選歌集叢書

日本派俳句 春夏秋冬 (子規等) 日本俳句抄 子規句集 明治新題句集 海紅 新傾向句 研究 春夏秋冬 (虛子) 井泉水句集 筑波會・秋聲 會其他 新俳句帖 紅葉句帳

新體詩 孝女白菊の歌 水沫集 若菜集 天地玄黃 一葉舟 夏草 落梅集 天地有情 無弦弓 泣菫詩集 春鳥集 海潮音 白羊宮 日本民謡全集 邪宗門 慶園 啄木遺稿 獨歩詩集

戲曲 黃門講釋 童幼講釋 夜討會 狩場曙 勸善懲惡 觀機關 桐一葉 杏手鳥 孤城落月 牧の方 俠客春雨傘 日蓮上人 辻説法 新曲浦島 義民甚兵衛 井伊大老の死 修善寺物語 邪宗門 慶園 啄木遺稿 獨歩詩集

隨筆 櫻葉集 花紅葉 雪月花 黃菊白菊 自然と人生 武藏野 病間録 仰臥漫録 墨汁一滴 潮待草 萩之家遺稿 筆のしづく み、ずの たはごと 筆のまに、 竹柏集 斷腸亭雜藁 偶像再興

漢詩文 蒼海全集 藤公詩存 春濤集 槐南集 小説神髓 ニイチエ 美的生活論 囚はれたる 文 非自然主義 近代文學十講 文藝思潮論 劇場最近十年 心頭雜草 宗教文學論 文藝百科要義 近代文藝 十講

坪内 落合 徳富 二葉 夏目 芳賀 尾形 正岡 幸田 上田 北村 徳富 大野 藤田 國木 高橋 田中 土田 通

近 (明)

傳記的政治小説 經國美談 佳人奇遇 雪中梅 創作 浮雲 五重塔 うたかたの記 瀧口入道 たけくらべ 金色夜叉 不如歸 高野聖 舞姫 破戒 運命 春命 我輩は 猫である

蓬生日記 亂れ髪 竹の里歌 萩の家歌集 アラ、ギ (雜誌) 啄木歌集 長塚節歌集 春泥集 空穂歌集 自選歌集叢書

日本派俳句 春夏秋冬 (子規等) 日本俳句抄 子規句集 明治新題句集 海紅 新傾向句 研究 春夏秋冬 (虛子) 井泉水句集 筑波會・秋聲 會其他 新俳句帖 紅葉句帳

新體詩 孝女白菊の歌 水沫集 若菜集 天地玄黃 一葉舟 夏草 落梅集 天地有情 無弦弓 泣菫詩集 春鳥集 海潮音 白羊宮 日本民謡全集 邪宗門 慶園 啄木遺稿 獨歩詩集

戲曲 黃門講釋 童幼講釋 夜討會 狩場曙 勸善懲惡 觀機關 桐一葉 杏手鳥 孤城落月 牧の方 俠客春雨傘 日蓮上人 辻説法 新曲浦島 義民甚兵衛 井伊大老の死 修善寺物語 邪宗門 慶園 啄木遺稿 獨歩詩集

隨筆 櫻葉集 花紅葉 雪月花 黃菊白菊 自然と人生 武藏野 病間録 仰臥漫録 墨汁一滴 潮待草 萩之家遺稿 筆のしづく み、ずの たはごと 筆のまに、 竹柏集 斷腸亭雜藁 偶像再興

漢詩文 蒼海全集 藤公詩存 春濤集 槐南集 小説神髓 ニイチエ 美的生活論 囚はれたる 文 非自然主義 近代文學十講 文藝思潮論 劇場最近十年 心頭雜草 宗教文學論 文藝百科要義 近代文藝 十講

坪内 落合 徳富 二葉 夏目 芳賀 尾形 正岡 幸田 上田 北村 徳富 大野 藤田 國木 高橋 田中 土田 通

坪内 落合 徳富 二葉 夏目 芳賀 尾形 正岡 幸田 上田 北村 徳富 大野 藤田 國木 高橋 田中 土田 通

近

(明治・大正・時・代)

代

自
二五二八

浮雲	五重塔	うたかたの記	瀧口入道	たけくらべ	金色夜叉	不如歸	高野聖	舞姫	破戒	運命	春	我輩は	猫である	草枕	ふらんす物語	鶉籠	虞美人草	平凡	土凡	新生	高潮舟	宣言	暗夜行路	大衆文學																											
(雜誌)	啄木歌集	長塚節歌集	春泥集	空穂歌集	自選歌集叢書																																														
明治新題句集	海紅	新傾向句	の研究	春夏秋冬	(虚子)	井泉水句集	筑波會・秋聲	會其他	新俳句帖	紅葉句帳																																									
一葉舟	夏草	落梅集	天地有情	無弦弓	泣菫詩集	春鳥集	海潮音	白羊宮	日本民謡全集	邪宗門	廢園	啄木遺稿	獨歩詩集	舞ごろも	日本象徴詩集	白秋小唄集	春月小曲集	白秋詩集	川路柳虹詩集	明治大正詩選	童謠	日本童謠集																													
硯機關	桐一葉	杏手鳥	孤城落月	牧の方	俠客春雨傘	日蓮上人	辻説法	新曲浦島	義民甚兵衛	井伊大老の死	修善寺物語																																								
自然と人生	武藏野	病間録	仰臥漫録	墨什一滴	潮待草	萩之家遺稿	筆のしづく	みづのたはごと	筆のまに	竹柏集	斷腸亭雜藁	偶像再興	光あれ	三太郎日記	人生と趣味	嵐の前	小鳥の來る日	洗心雜話	山水巡禮	飯倉だより	冬彦集	藪柑子集	三都物語	生命の微光	靜思餘錄	山中雜記	七寶の柱	春を待ちつゝ	樹木とその葉	季節の窓	野を歩む者	旅と歌と	若き自然	靜と動との間	洗心錄	生田春月全集	感想小品	芥川龍之介集	草木蟲魚	茶話抄	水藻	樹下石上	續冬彦集								
評論	小説神髓	ニイチエ	美的生活論	囚はれたる	非自然主義	近代文學十講	文藝思潮論	劇場最近十年	心頭雜草	宗教文學論	文藝百科要義	近代文藝	十二講	日本現代文學	十二講																																				
夏	芳	正	尾	幸	上	北	徳	大	藤	國	高	岡	岡	網	佐	高	五	姉	河	金	尾	島	沼	近	薄	長	吉	正	相	荻	山	若	土	北	石	吉	川	三	芥	西	生										

